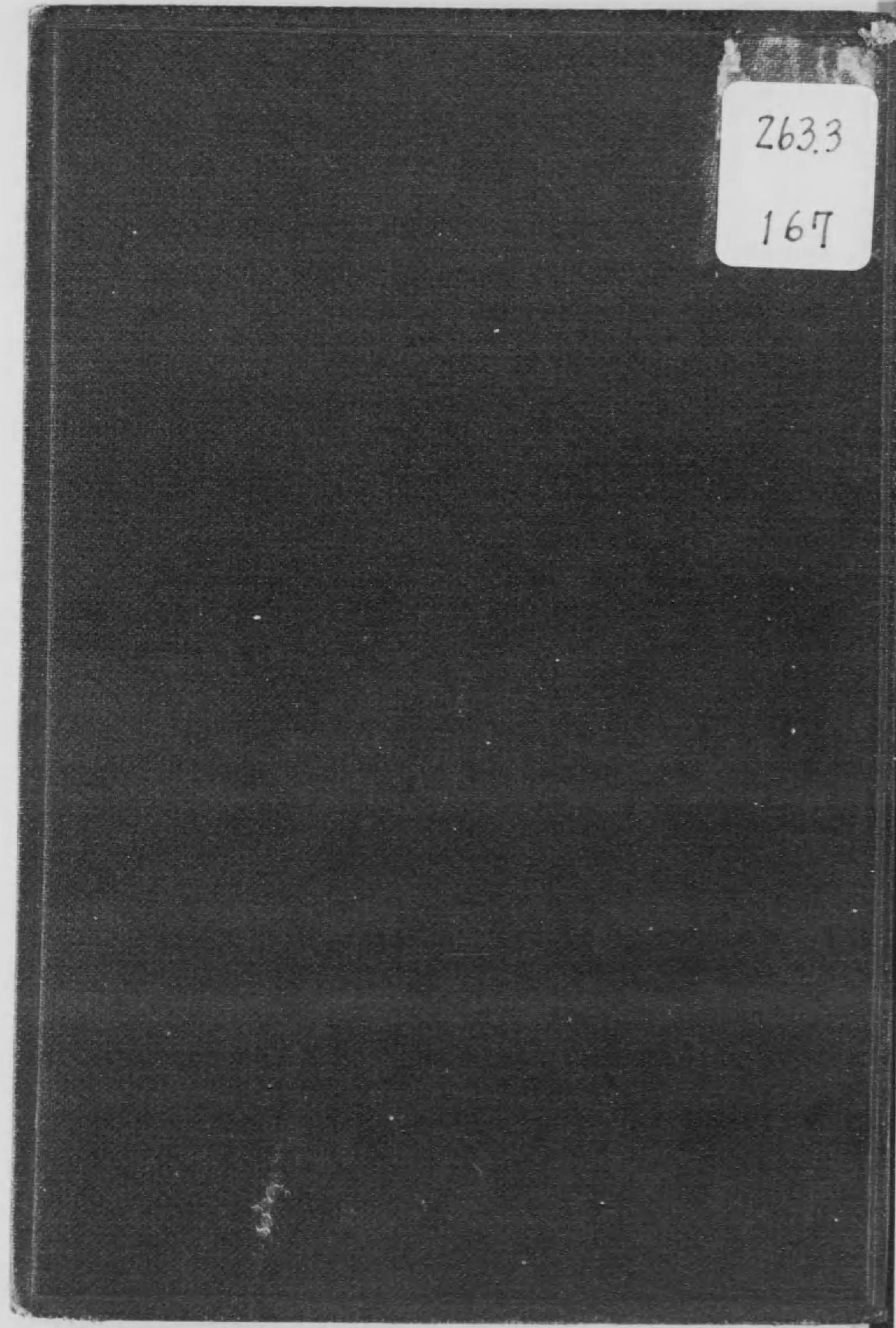


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{mm} 1 2 3 4 5

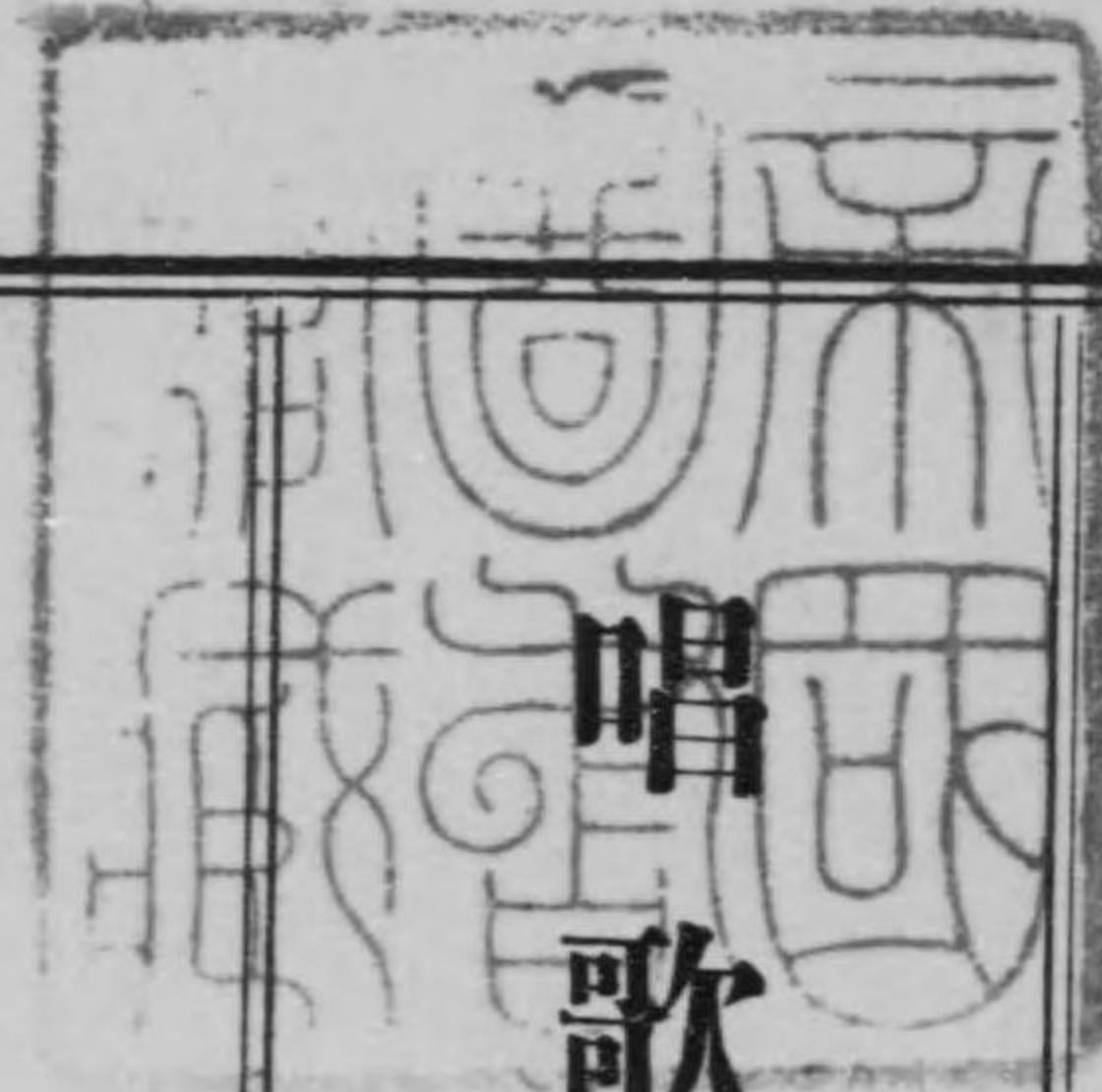
263.3

167

始



263.3-167



菊池盛太郎著

唱歌教授の改造

聚英閣

大正
10 11.27
内交



自序

回顧すれば予が始めて學校音樂に携はつたのは、實に明治三十三年恩師小山作之助先生の推舉に依つて東京市日本橋區有馬小學校訓導の任に就いたのがそも起點で、其の歳は忘れもしない、畏くも 今上陛下が、未だ東宮にて御在しました時國家にとつて一大盛典が執り行はれた年で有つたので有る。

その五月十日の佳辰に今の 皇后陛下を御迎へ遊ばさるゝ御婚儀の盛儀が行はれて、下萬民の喜悅は例ふるにも無く、全國幾十萬の小學兒童、中等學校の學生は『八重垣つくる御園生の、霞に朝日照り添ひて、千代の友鶴鳴き渡る東の宮居の長閑さよ』と熱烈なる歌聲を張り揚げて萬腔眞率なる聲音を歌譜に現はしたのであつた。

それがウロウロの宥らかな美しいメロデーで歌ひ心地の晴々した節調で有つた事も思ひ出されるが、曲節は時の音楽學校教授幸田延子女史と歌詩はたしか中村秋香氏の作であつたと記憶して居るのである。

數へて見るともう二十年の月日を過したので、或る時は近つ近江の琵琶湖畔の師範學校に樂鞭を執り、轉じては市内雜沓の衢たる淺草區に又或る時は遠く綠濃き山陰の久松山下の中學校に師範校に『見よや見よや久松山の秋の色紅葉は紅にそみ出で、』など、得意満面の時代も有つたが、生れ故郷の東京市に歸任して帝都鼙鼓の下しかも大内山の松風を聴き、その玉露を朝な夕なに身に滲めて邦家音楽教育首都教育の爲めと一意専念、素りに新奇を追はずさりとて舊式に捉はれずつまり中軸の見地に立つて次代の國民音楽の爲に没頭して居るのが今日の現在である。

年は進み月は歩み日は刻々と流れ去つて随分と現社會は複雑に成つて來た、
教育音樂界の内容にも凡てに於て改善す可きもの改造す可きもの創造す可きもの、
幾多が吾等の前に堆積して何んとか解決せよ々と吾等に訴ふるのである事は
誠に無理もない事で、吾人はこれ等の要求なるものを無下に斥けてはならぬ
而已でなく、大に此の要求に向つて必然的に之が解決を爲す可き責任と自覺が
無くてはならぬと思はれる。

我が國に於て西洋種の音樂を移植して之を教育音樂に實施してから彼れ此れ
最早五十年の歲月を閲して居つて、中々に實社會の進運と共に斯科も進歩した
ものが多々有るのである、十年前の中等教育の音樂科の質と量とは近時では小
學校の唱歌教授に於て充分に咀嚼し得る事が出來得る。又十年以前の専門の音
樂者の質と量とは今日では少しく素質の確かりした素人アマチュアでも其れ位

は嚙る事が出来る位に進展して来た現象で有つて、昔の音楽學校優等卒業生の技巧は今日質の能い同本科二年生ならば充分比較するに優劣が無い迄に進歩の現在で有るのであるから、一面から環視する時に其の進度に於て誠に満足であるかの様に見ゆるが、之を教育音楽の方面から見下したならばサテ如何であるかと云ふ事を吾れ人俱に大に考へざるを得ないこれが教育音楽界問題中の一大問題であるので有る。

現今我國に於ける教育音楽の質の方面と量の方面と其効果の三方面のみならず一般の唱歌教授法の實状態が果して、ど、れ、だ、け、正、鵠、完、全、の、域、に、進、ん、だ、で、有、ら、う、か、、眞に解剖のメスを探つて之を分類して見たならば其價値は果して何うで有らうか、決して安心の出來得るものではない。

漸く實施以降四十有餘年の短日月之を歐米先進の國々の實際と比肩し得らるゝ

か？ 其の内容が誠にお羞しい極りの悪い事のみで満たされて居るので試みに小學校等でも其の曲節に、兒、童、の、發、聲、に、、伴、奏、の、彈、き、方、に、、拍、節、法、に、、エ、キ、ス、ブ、レ、ッ、シ、ョ、ン、に、、教、師、の、範、奏、唱、に、、曰、く、何、曰、く、何、！と遺憾千萬ではあるまいか、歐米の音楽教育家が一日多數隊を成して參觀に來たと假想したならば、大言の様では有るが額と腋下には玉なす汗！顔面は蒼白に變つて身も世もあられざる程に感ずる人々が必ず十中の八九までが左様で有らうと考へらるゝので有つて、(自分の本質を知らず自惚とお天狗に成り了つた人は格別で)現在我國の教育音楽の赤裸の有様が何うしても如斯現象で有るから已むを得ない

一日の長で有る國の人々の來聴でさへ吾人は然かく考へられて誠に心細く何處か好き穴でも有らば消えも入り度く考へらるゝのに、之を藝術の美神が傍に在つて聽いて御座ると云ふ事に成るとサテ如何うで有らうと想像する！美、の、神、様

が熱い涙を零して泣いて御座る實際を目前に見たとすると吾人は實際喪心して卒倒でもしなければ義理が立つまいと思はれる。

吾人は一日も早く此の實在から超越をせねば成らぬ。そして此の悲觀論で無い實際論を打ち破る可く的確な成績と證據を見せ附けてサア何うだ是れでも我國の教育音楽は不振であり幼稚であるか？ 承り度いと力む程な頼もしい勇ましい猛者の多數の出現を待ち望んで居るのである。

此の外教育音楽上の懸案たる多數の諸問題の解決が未済の儘で堆高く机上に有り、又改廢すべき諸問題が多々有るので有るから此等に就て研究の歩を進め大に考究して大膽乍ら何とか確たる斷案を下して後進と共に手を携へて進んで行きたいものと思ふので有る。

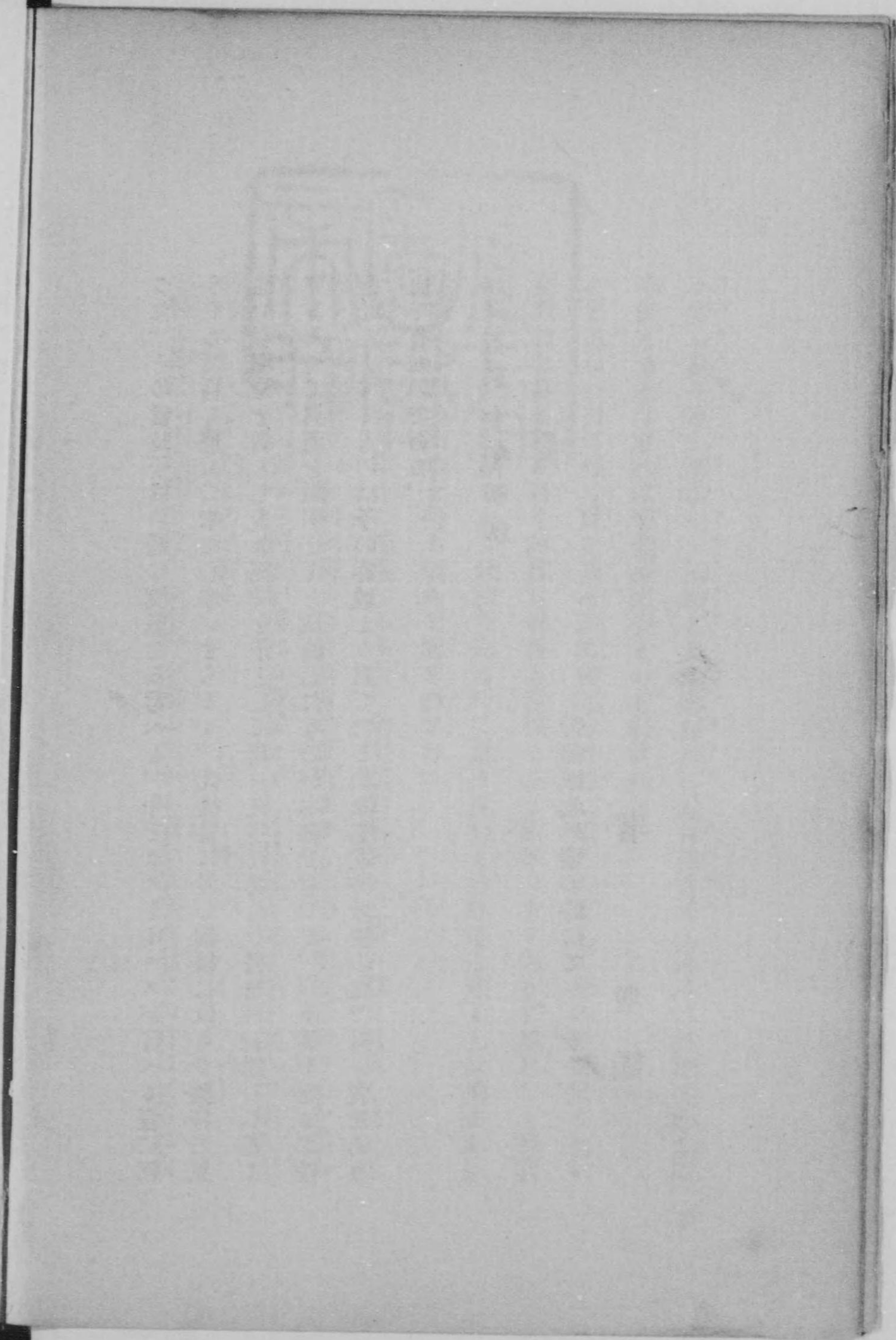
嘗て拙著『唱歌科教授の新潮』を書いてから最早足掛け七年の月日が流れ去

つた。その當時子供の様な漠然たる考へも、今ではノイエスが言へる程に何うやる頭腦も整ふて來た心地がせらるゝ、此機會に於て舊稿に依らず獨特の見地から理論を楯とし貴き經驗を矛として眞一文字に進んで唱歌科教授の本壘に突き入つて眞理を闡明せんと期圖したものが本書で有つて、以下稿を逐ふて披瀝せんとするものは予の赤誠より出でたる我國唱歌科教授の血で有り骨であり肉で有るのである。

大正十年初秋

帝都城北外濠の畔にて

著者識



唱歌教授の改造

目次

一、人々其天分に生きよ……………	一
二、正しき發聲に就て……………	九
三、樂譜教授上の問題……………	一九
四、教材選擇と新童謡問題……………	二三
五、調子と其教練……………	三三
六、新らしい唱歌の教授振り……………	四八
七、音樂科教室の改造を望む……………	五七

八、學校音樂家本質の改善に就いて……………	六二
九、西洋音樂趣味の教育的普及……………	六八
一〇、西洋樂器の一般的普及……………	七三
一一、學校唱歌と獨唱……………	七八
一二、(タクト)指揮法に就て……………	八二
一三、音色の研究……………	八八
一四、簡易歌曲伴奏作譜法に就て……………	九五
一五、唱歌教授實驗上の時間割……………	一二七
一六、唱歌教授上の秘訣一則……………	一三一
一七、將來の學校音樂に對する冀望……………	一三八

唱歌教授の改造

一人々其天分に生きよ



學校音樂家——教育音樂家は日常兒童又は學生なる對象に向つて、藝術中の最上なる音樂を取扱つて之を教育的に教授し、之を善導し之を以て彼等を薰化し品性の陶冶なる根柢的目標に結び附けて即ち人格的陶冶を主宰するのに有る

事は其の職務の主眼目で有る。それと共に一面偉大なる社會的風教のコンダクター指揮者で有つて、其國家百年千年の風俗の指示者で有らねば成らぬ。

それは音樂の特に傑出したる鴻大無邊なる力一種の威力を利用して、深く人



心の奥底に植る附く可き徹底せしむ可き、重き、深き、尊き、強き使命の向途を三省し考慮して常に進み行く可く日々之が使命を享けたる條項を遵奉して、如何に之を善用す可きか如何に活用す可きかの研究は實に日常座臥夢魂の裡にも決して忘れてはならぬ所で其責任や頗る重大なるものと言ふ可きで、彼の政治家や軍人等が國家の爲に身魂を打ち込むなど、云ふ事などはとても比較に成ら無い程力強く、價值的に無限の効果に満たされたものと言ふ可きで有る。かるが故に學校音樂家は先づ第一歩として最も堅實なる信念の礎の上に立ち、確乎不拔の意志の下に、主として其腹を作り其頭腦を作り其信條を實行せよと、吾人は改めて此の語を寄せんとするので有る。

學校音樂家は其技術其技巧よりも主たる可きは第一條たる其的確な頭腦と其信念で有るのであつて、此二者の力強き結合はやがて音樂教育家それ自身の偉力と爲り實力となつて、一般社會に或は直接學生兒童に明快なる觸覺を與へ認識を得せしめて自己の仕事の効果を擧ぐる最初の發程で有ると言つて毫も差支は無いので有る。これ有ればこそ、やがて其仕事は其收穫の秋の實衡量が増減せらるゝメートルで有る事を特筆せざるを得ない、此の主點は大に考慮を用ゐられんことを希望して己まぬので有る。

吾人は陽春四月の候、朝まだき墨堤に杖を曳き櫻花絢爛の下に獨り座して言問の茶亭『名にしおはいざ言問はん都鳥』に憩ひ、日本神國の代表花たるあの旭日に映する光に満ちた燎爛の櫻花を眺めつゝ、偶々深く感ずる有りて『櫻咲く國に生れて教師哉』と一句を詠せり、之を口咏する人の心に仍りては如何様の解釋を試みらるゝもそれは御自由であるが、吾人の心理は斯くの如き麗はしき純なる——清淨なる——聖なる我國特有の櫻花を觀賞する時に於て、嗚呼

我れこそ何たる光榮者ぞ幸福者ぞ、此の神國に生を享け此の名花の發祥地たる日本國民として然かも尊尙し愛好する音樂と言ふ藝術を日夜に親しみ、然して此の藝術の教育に關與して音樂教育者として自己自由の天地に活動し得て、自己の欲する處を之を人に授くるの榮職榮冠を今更に了り、眞に我身の光榮を欣仰し之を舒べたる意義で有つて、眞に克くこそ吾れは學校音樂家としての榮職に携はるの光榮を讚美し之を感謝したる小詩で有つたので有る。

煥輪の美なる大奏樂堂に於て其ステージに於て幾千の聽衆を酔はしむ可き、大ピアノニストー大オルガニストー大ヴァイオリニストー大ソロニストと雖其の人格的ならざるもの即ち其の人物と其品性の備はらざるもの有つたならば吾れは之を決して偉業であると信ずる譯には行かぬので有つて、其の人物に就て其の頭腦と其の腹と其の信念の無き大演奏家は、之を酷評すれば卑しむ可き下賤の

一種の藝人であつて、一個のピアノラー一個のバイブオルガン彈奏機械若しくは蓄音機の如きものと少しも變り無い、否それよりも國家社會を毒する魔人ではあるまいかと一言の下に之を評價し盡したいので有る。

今更乍ら彼の波蘭の人バデレウスキイ（現代世界第一流の洋琴家として一般に認めらるゝ名手）氏がピアノの鍵盤に依つて名曲を演奏する一面には、大統領の榮冠を戴いて一國の政治風教を主宰する事實を今更事新らしく嘖々するものでは無いが、音樂家は畢竟如斯有る可きで有つて、一國の政治風教若しくは人間の靈性を喚び起し正しきに向はしめ愚惡に遠ざからしむるものは蓋し音樂を措きては他に無いので有ることを切言したいので有る。

學校音樂家は常に吾人の考ふる所を以てすれば、餘りに其技術上の負擔と其責任が重過ぎはしまいかと思はれる。例へば一人の教師にしてもピアノもオル

ガンも又はヴァイオリンも皆相當の技術が入用であつて聲樂にも堪能の要求が有る、外に教育學や哲學心理學の基礎的學科の心得も必要であるし、加ふるに其教授法に教法の研究も甚大なる要求を促がされて居る。此の外小リード形式の作曲やら或る時は詩歌小唄の作詩迄にも頭を苦しめなければならぬ、何とそれ其負擔の過重なる事ではあるまいか。

之れ吾人か茲に人々其天分に生きよと書き綴りたる要項で有るのであつて、生來ピアノを愛好する學校音樂家は皆ピアノ専門として歌曲に伴奏に奏樂に、一々ピアノを以て之を彈奏公演したならば之はそれが一番正しい意味で之をして其れにて事足る事と思ふのである。次にオルガニストは素よりオルガンを愛好し之を修業したので有るから、學校音樂家としても歌曲に伴奏に之を彈奏し、益々其技を進め其深奥を探り求めたならば之れにて充分事足る事であると思

ふ。ヴァイオリンの得意なる學校音樂家は（之は大に考へもので且餘程巧妙の域に迄進歩を要す）ヴァイオリンを使用して教授に歌曲演奏に之を重用して行つて、少しも無理の無い事であつて寧ろ之を勧めたいものと思ふのである。予の知れる一外人教師は多人數の合唱をヴァイオリン一挺で巧妙に伴奏的に取扱つたり、或はメロデーに合せたりして立派に美しい唱歌教授に成功して居る向も有るので、ヴァイオリンで唱歌教授を行ふと言ふことは大に多々増々研究の餘地を存して居ると言つて差支ないのである。天稟し聲音の麗しい聲樂の妙を持たる、美聲家は、タクト棒の巧妙なる使用を會得して（頗る其音量及音程に留意して）其の天賦の美聲を重用して主として教授したならば、幾分か大なる負擔に身心を勞することも無く、餘地の有る効果の擧がる唱歌教授を成し遂ぐ事を得ると明言するのである。

オルガン専門家の弾するピアノは其タッチの間が抜けた音色の悪いエキस्प
レツションの無味なものと成り了ることは先刻諸君の御存じの如くであり、何
にも弾けもしないヴァイオリンをピアノリストが汗みどろに成つて弾く必要は決
して無いので、茲に於て借自然に歸れ——自己の本質に歸れ——自己の十八番
に生きよ——特質を描き出せと述ぶるのであつて、然して國家百年の音樂的基
調を植ゑ附け大計を畫策し熟慮し、次代國民に残す可き能き音樂上の薰化を吟
味して、かくて吾人は學校音樂家として人生の最高目的に透達す可く生きて行
かねば爲らぬ。

頭腦と信念と技術の三條が結合せられて一致活躍しつゝ進んで行つたとした
ならば、人々は其本分に生くる計りでなく、音樂教育なるもの、光輝は實に燦
として無比の寶玉の如く煌くであらう。

二、正しき發聲に就て

學校唱歌の基本なるものは實に正しい發聲と發音なるものであつて、發聲練
習なるものは唱歌教授の實に生命で有る。發聲機關としての咽喉生理上の大切
なる事項を明らかに知り喉頭と聲帯の作用を眞に知悉したならば、其の弛緩—
—緊張——長短——伸縮の運動作用の巧妙に一驚を喫すると共にこれが自然の
状態を知つては、決して在來の如き強い聲を振ふことは生理上出來得可きこ
とで無いことが釋明するのであるが、ともすると非生理的な發聲法をまだく
行つて居る面々が尠なからず有るのは常に甚だ遺憾に思つて居る所である。

『聲樂の一部たる唱歌とは肉聲を用ひて旋律的に唱謠せらるゝもので、必ず
人體生理の自然に悖つては成らない』と云ふ言葉は各人の口を突いて出づる事

ながら、さて實際の状態は如何だらうと疑問が多々あるのである。

聲を美にする練習が反つて聲を枯らす（聲帯に充血を起させ其運動を不規則にさせ遂に喉頭加答兒を起させる）練習に成つて居るのは往々見聞するところで誠に困つた事であるので有る。殊に小學兒童の變聲期以前の兒童にしてC D迄すら出し得ない様では如何にしてか音樂的美感の養成に資する事を得やう。

一般の唱歌教授は中々に進歩して來た現代で未だ明治時代の遺物で有る非音樂的な叫聲暴聲を練習させて居るのは餘りに時代錯誤の甚だしいものでは有るまいか。

彼の時代に於ては日清日露の兩戰役時代熾んに海陸軍と云ふ軍門を唯一の力頼みとし、世人一般及諸種の學校迄が軍歌に軍事教育に日を嗣いで執り行つて來て殆んど寧日無しといふ有様であつたから、従つて軍歌だヤレ凱旋歌だと大

にどなり廻つて居つた。其の遺物は今の兵士の行軍歌等に就て窺つて見たならば明瞭なる事項で、とても美なる聲音など、洒落れて居られる場合では無かつたので有る。其等に日常親しんで居た世人は今でも生硬なシャープな聲に耳慣れた習慣から音樂的の軟か味の有る優し味を持つた即ち生理的音樂的の聲音を聽いて耳なし猿の癖に弱々しい聲であるとか女々しい聲で有るとか力の無い聲で有るとか批評をするので有る。

是等の妄評を恐れてともすれば不自然な聲を出しても一々矯正したり咎めたりする事なしにヅボラに經過して遂に病は暴聲と云ふ結核病になつてしまつたので有る。

教授者が已上の如くでなければ或は兒童發聲に際し其聲音の本質及適度の分量と云ふ事に關し全然無知識で有るかも知れないと思ふ。

多人數合唱の際など兒童は雷同的ニ群衆心理的に強度の量を出す等の事が往々有つて、經驗の淺い教師は時にマゴつく事が無いでもない、或は實際の苦心を知らず所置の方法を知らず一音も一音半も音程の低下するのに、あはてゝ移調をして一度も二度も伴奏を變換する者が有ることは事實で有るから是非も無いではないか。専門的發聲法でも獨逸系統の發聲發音は凡てに何となく強度であつて、圓滑な重味の有る中に何とは無しに音程の下り易い様な心地がせられ、翻つて伊太利系統の發聲發音は輕快で頭音を樂々と出す事が出来る心地がせらるゝ。前者は東京音樂學校派彼のユンケル、ベツオード夫人の發聲式で、後者はザルコリー又は嘗て帝劇に居つたオペラ？のロシーなどの流を汲むオペレット派の式とでも名付けやう。

正しい音樂的發聲から要求するならば、現時のピアノ伴奏の音量も大に減じ

て貰ひたい。聲樂の伴奏と云ふ事を忘れて現在學校音樂ではピアノと聲音のデュエットで全然有る。之は實に教師の手加減を要すること、何時如何なる場所に於ても伴奏は必ず *Acompañimento* の特質を失つては成らぬと思はれる。

音程の下がるのをピアノの音で叩き出すなどは現今の常套的手段では有るが一面から見ればその叩き出す一音で折角連續し來つた今迄の音樂の好進行がメチャメチャに成るのである。是等は音樂的に考察したならば實に心持ちの悪い事ではあるまいか。ピアノの音が強音ならば従つて兒童學生の出す聲音も強く荒くなるので有らねばならぬ。この點は大にまだ未だ考究すべき要領で有ることを忘れてはならぬ。

大人の一步步む足の間隔と小兒の一步步む間隔とは自ら其所に相違の有る事は一見して分明するのであつて、學校音樂で教師の範唱が大聲ならば兒童の唱

聲も大きくなるのは自然の趨勢ではあるまいか。教師が地聲ならば直ちに響に應じて地聲を疑似る、教師が枯れ聲ならば兒童も知らず知らず枯れ聲の様な風になる傾向がある。

嘗て不肖は某市の或る講習會に出講して前講の講師が誠に平生聲の出ない人であつて『今日は風を引いて居るので聲が出ません』と言譯を言ひつゝ、教授にかゝつたので有るが、講習員は何となく沈みを帯びて灰色の氣味になり中にはゴホンゴホンと咳をする者も出來て來る、漸く重い氣味で一曲を了へた。其後を享けて不肖は『何だか今のは沈靜であつたが小生の曲は一つ明かるく氣分よく唱つて貰ひたい』と出た。大人の講習員であり乍ら其の一言で顔面も生々とし誰一人咳などするものなく、心地能き唱聲で一段と美しい聲の響を漂せてさも愉快に其講習を了つたので有つた。

智情意の完全に發達したる大人の教員諸彦にして且然りて、如斯き現象を見るに就ても常に當該教師の態度——素質——發聲と其教法とが如何に至大の關係を持つて居つて苟くも缺くる所有る可からざるは凡そ此一事に於ても明瞭に理解せらるゝので有る。

正しき發聲の要訣は清朗、圓滑、艶美なる聲音たるに至らしむる練習を能く極め、此の目的に向つての方法と手段に於て完璧を期したるものたらざる可からざるを謂ふのである。

西諺に『聲音は粘土細工の如し』とあり、之の語の意味たる聲音は其練習方法の如何に依つては眞に美とも成り醜ともなる可しとの譯なので有つて、彼の歐洲の本場に於ては専門的に練聲師（音聲を鍛練して美艶ならしむる技術者）なるものあり、オペラシンガー、演説家、歌謠家など其所に出入して音聲上の

練磨を受けて練聲の上、次第に獨唱等を學習する順序を有すると云ふ。我國の學校音樂家は一面には此の練聲師と教育音樂教師とを常に兼務しつゝ有るものと心得ねば成らぬ事で、然らば發聲上各般の規則的條項を明知し其の方法と同時に唱歌科教授とを併進して行く可きで其責務の大なる其専門的なる語を換へて云へばドクトル又は醫學博士の研究にも勝りて複雑の事柄であると云つて差支ない。

發音の教練は發聲の教練に密着なる關係を有し音樂的發聲の鍛練が出来上らんとすると同時に發韻を正し之を音樂上に用途す可く練熟せねば成らぬ事である。音樂教師の責務中最も緊要なるは兒童學生の發音を正確にさせ明瞭にさせ美しくさせること云ふ事が大切なることで『言語學上の發韻教師である』と云ふ觀念は常に念頭から離す可からざる第一要件であるのである。

我日本國も地圖の上から瞰下すると餘り大きい國では無いが其分布する發音から云へば北は樺太より南臺灣あるは朝鮮八道と云つた様に随分と掛け離れた言語を使用するので、地方人士が其方言で話し合つて居るのを聴くと、これも我が同胞で有るかと思ふを起さざるを得ない程である。姿た貌は同胞であるが言語は異邦人の感じがするのはよく經驗するので有つて随分と全國には相變つた言語發音が有るので、随つて之を統一し之を整理するには甚多くの年月を要すべきである。之れ等の斧正統一は實に音樂教師を待つて始めて出來得る事項で有つて國の言語の技師で有ると同時に言語の師範役で有らねばならぬ。

中央標準語（東京市中流社會の用語）で書き綴つて有る國語の話方を教室では使用し乍ら一度校門を出るとスグ又方言になつてしまふ、それが家庭へ歸ると又家庭の常套語に變る、一人の人間が二重にも三重にも言語を使用する。

之れ等は是非々々改良すべき點で、國字の改良など、言つて居る人々は、先づこの言語から出發せねばならぬ事を了解して貰いたいものと思ふて已まぬ次第で有る。

之を要するに小學校及中等學校の唱歌教授の聲音は今の所完全正確で無い、音樂上に使用すべき聲音は大に研究して改善を要す可きで有ると言つて憚らぬので有る。

是れに就ては是非其根本で有る教師即ち音樂教育家の發聲發音を今一層吟味し鍛練し工風せねばならぬ、多くの音樂教育家の中には今でも聲音の (Regin fort) 換聲法をさへ知らず、兒童の發聲に際して頭聲の使用を明示し得ない人も有る様では甚心細い次第では有るまいか。

三、樂譜教授上の問題

口授教式は一名之を鸚鵡式教授と名づけ主として聽覺の作用に基いて教授者の口唱を耳に傳へ模倣的に一々疑似する形式であつて、専ら幼童尋常一二年の兒童に對して採る可き方法なのである。此法は極く容易に兒童に習得し得せしむ可き様であるが、此教式程唱歌教授上の土臺となり深慮を要する式は有るまいと信するのである。それは何故かと言へば兒童等の模倣力を一々誘致し、教師の口唱に依つて範を採らしむるにあるから最も熟練正確なる好模範の必要があるもので、若しもこの範唱なるものが不良（音樂的）で有るとしたならば、彼の罪なき兒童等は其儘其不良を模倣し、誤謬を傳ふれば其誤謬を其儘寫眞の如く模倣する事になる何と恐ろしい事では有るまいか『教師の一聲一音は兒童と

云ふレンズに撮影されるので有るから此の範唱程留意を要することは無いので有る、やゝもすると範唱を忽諾に附して後取り返しの附かぬ悔を怨む教師は自己の不敏を嘆く可きで有る。

『略譜式教授は廢止せよ』これ迄は口授式教授の後を享けて假字文字及數字を讀むに至ると必略譜に結び附けたものだが、茲に聲を大にして吾人の叫號したい事は今迄の略譜教授は全廢すべしと述ぶるので有る。骨折り損のくたびれ利きは實に吾人の採らざる所でなければならぬ。此の問題に就ては屢々誌上に公表した事で、自身も亦廢止を實行しつゝ有る勇者であることを明言する。口授教式と本譜教式との中間媒介者の必用な時代は疾くに過ぎ去つてしまつたのであつて、略譜は實に過去の遺物視する時代と成り來つたのである。

本譜の構成は最完全で有つて、一般音楽者と其研究者にとつて重寶缺く可か

らざる程に、其構成の妙が時を経又時代を経て今日の如き完璧に達したのもで一名萬國語とも稱へらるゝので有る。

其の法、音の記載一目瞭然で、極細微の旋律の如きをも一見して彈奏の妙を得可く、明らかに樂想を明記し且其高低を知悉せしむ可く所謂『痒い所へ手が届く』の如くで有る。

現時の出版音楽書籍を見るも最早略譜の時代では無いので有る。之れに就て或る人々は本譜を容易に讀める教員は未だ中々多くないと言ふ人が有る。之は甚だ笑ふに堪えたる事で、そんな教員即ち本譜を能く讀めない様な人は、音楽の教員では無いので、そういふ方は現代の學校音楽界から早く引退をして貰いたいので有る。

尋常科第三學年から徐々に五線四間、音符、休止符、拍子、調子等の一般理

法を授け、其の調子を書き直す等の事無しに、作曲者の與へたる調子に於て讀譜練習より導いて容易に讀み得るに至らしめ且理論の一端を了解せしめて可視的に音樂を奏唱する能力を興ふべきで有る

視唱法々々と今日迄随分各方面で研究もした、合議もした、批評教授もしたが、サテそれで眞の堂に入つた視唱法を行つて居る小學校は未だ極く稀れで有るので有る。或る學校では半口授式や全くの讀譜的口授式で教師一人が口八丁手八丁おまけに喉八丁で一人ヤキモキお芝居をして居る。ソレを兒童はボカんと見物をして居つてイヨ成駒屋！と敢て褒めるでもない。之れでは何年の時にか視唱法の完成を望む事が出來得るか？何うか一日も早く多くの學校音樂家が此の完成に努力し正當なる感服に價する樂譜教授の大成を期し、我國學校音樂の完成期を現出し其の心地よき嚶曉たる樂音を耳にし乍ら御互に祝辭を交換す

る時代に到達せんことを願つて已まぬ次第で有る。

四、教材選擇と新童謠問題

唱歌教授に資す可き教授の材料即ち教材は其科の目的に依り之を精選することを要する。吾人が身體の營養に資すべく肉汁野菜等の滋養性分を吸収すると比しく、斯科の教授の目的を達せん爲めには實に選びに選びたる優良なる教材を選択せねばならぬ。然して唱歌科教授に採用す可き教材は能く斯科の本領に適應するものであつて、唱歌科が眞の目標とする人間の教育最高目的たる即ち品性陶冶の資料國民的品格の形成に一致適合す可き好材料で有ると同時に、斯科獨特の教育力を含む併せて現代の社會人智に副ふ可き必須なるものでなければならぬ。音樂の普及時代から今日の盛時迄に我國に於て選擇された唱歌科

の教材は其數實に數多く有つて外來の名曲佳作、邦人の作品に係る優良曲の全部を一々擧げたならば眞に駭く可き大部の曲數に上るので、吾人は平素是等の作品中を一度選りに選つて、次代國民に遺す可き作品と紙屑籠の中へ破棄すべきものを選び別け千古不磨の名作と一山百文的の駄作とを區別して見たいもの考へて、何日かは同志の士と協力して行ひたいと思ふて居るので有るが、この仕事が出来れば其の中から學年別に又精選したならば眞に適當の教材が得らるゝと思ふのである。

あの曲は随分古い！あれは最早現時の教材として用ふ可きものではない！等と新古を以て名曲を批判されたならば、ベートーベンもバッハもモーツアルトも泣き出してしまふのである。教材の曲節に就ては旋律、音域、拍子、曲想、程度等から見て綿密なる考慮を要すべく、教授者御自身自身の好尚に依り趣味を以て

選り、速斷的に兒童の心的状態を顧みずして採擇して行くツマリ自己標準で一人ホク／＼喜んで教授する傾向は今になつても取り去られ無い、これは輕擧の事柄で有る計りで無く、子供が大に迷惑千萬で大なる弊害の伴ふ所で有る。

近時教育音樂に携はる人士又は一部の人々の所説或は新傾向とも曰ふべきもの、中で漸次に其頭を擡ち上げ來つたのは、實に學校音樂と新童謠なる問題が有るので有る。

蓋教育音樂のスタートから能く考へて見たならば、其國の國風俚歌即ち子供にしては童謠の基調から進展して行くのは、其論理と實際に於て必ず當を得て居るので有つて現今之の問題が何にも事新らしく云々せらるゝ迄も無く、世界の事情が之を證明して居つて、古より歐洲文明の源泉を彩つた彼のグリーキ文明の當時から之の事は有つた事で決して耳新らしい事柄では無いので有る。

我が日本に於ても明治の十餘年已に俚歌童謠を全國より蒐集して之を取捨し或は之を唱歌集の中に取り入れて世に示し、若しくは之を教育音樂の根底的研究として論及したる先輩に、斯界の恩師故伊澤修二先生竝に現存の小山作之助先生等有るのであつて、必ずしも之の問題が我國教育音樂の中普通教育音樂史上に記録せられて居ない譯では無かつた。

乍然本邦には俚歌童謠の中に就て、直ちに採擇して以て教育的教科に組入る可き好材料と必適な題材及内容が多くないので、其類の中には随分と鄙野な頻蹙的品物が多く、とても眞面目な教育音樂上から見ても満足す可き題材の多くを得難いのは、當時の鄙俗低級な民智及情操の赤裸々な發露であるから無理もない。

英、佛、等の國々は皆夫れそれ傳統的な子供の歌曲を持つて居て、彼の獨逸に

した所で小學校教材適用のそも最初は獨逸國俗謠より教へ授け始めると云ふ。乍去前述の如く本邦には之等の能きものがない、従つて現在の子供用の歌曲は何だか之れと云つて餘りに甘い味のしない作品計りで、文部省著作の尋常小學唱歌も大きな聲では云へぬが實は少々鼻について來た近時の有様なので、何うしても新童謠の問題が漸次に葉を出し枝を出して來る。

新興帝國の我國に於ては其國柄に適應す可き國民的新音樂の創設が必要である事は論ずる迄も無い至極結構な事であるので、新時代は其時代に匹敵した作品を強要して已まない。

大正の年も最早茲に十年を経るに至つた、古き革袋に新らしき酒を盛る事が不合理なる如く、古き教材のみで之からの新人の大切な情操教育を盡さうと思ふのは少しく無理の様だ！

此の點に向つて世の創作家、作曲家、の一大奮起を願つて已まない次第で有ると同時に、最近勃興の新童謡なるものの中には教育的唱歌教授上から見て『如何のものにや』と考へざるを得ない刊行曲もまゝ有る様で有る、一々調べて見ると随分數多く少年少女向の作曲なり作品が有るが、之れは音樂教育の上から見て良教材を取捨選擇するに際し誠に手數のかゝる事で有り大に考慮を要する事で有り又至難の事柄で有るので有る。

此秋に當つて作曲家及作詩家に對して注文す可き事柄は現時新作の童謡中には『ほんたうに兒供になつて作歌作曲する』眞に子供と云ふものを攫み得て、兒童天真爛漫の聲で有り、響で有り、メロデーで有る、事に就て更に一層の注意が願ひたいので、或る童謡歌曲中には『子供の童謡か？大人の童謡か？』と思はれる寧ろ社會及大人に向つて御自身の作曲誇張で有る品物が含まれては居

らないか？とは一部の人々の諷刺的意見である。其伴奏なども態と何と無く難づかしく演奏し悪い様に作られたかの傾が無いでもない、今日随分音樂は進んで來たとはいへ、中々地方などの小學校の先生方には直ちに弾き試みて其の妙味を窺へない様な風に出來上つて居はしまいか？この點は一段の研究を要すべき所で有らねばならぬ。

『特長を矯めて其特短を補ふ』と云ふ方式は我國教育上の最短所であつて、劃一的で有るとか或は石鹼製造式方法で有るとか謂はれるのは皆之れに胚胎するので有る。かの文部省著作尋常小學唱歌の如き（一より六まで）も此の御多分に漏れぬ所で誠に申し悪い話では有るが煎じて云へば、委員協定式方法であるから皆寄り集まつて一々作曲を批評し合つて、そこで特長を削り其特短を補つて行く、然して其れに合格した無疵の作品が配列せらるゝので有るから、言は

い。是れ常識的作品と云つた譯で、特に悪い作品の無い代償には特に傑出した名作が無いと考へるのは平素兒童に試みて否日常教授しつゝ學童と云ふ明鏡に照して事實が證明する所であつて、歌曲の中には随分子供は欠伸を噛み殺して我慢して歌つて行くのも有る。教師も同様の風で教へ導くと云つた感想は強ち詭りの言辭では無いので有る。

此の文部省尋常小學唱歌も初刊以來もう十年になる。之れを一つ羅斗よらいにかけて、出來得可くは陶汰的に前に述べた様な餘り効果の尠い作品を取捨して、別に民間から潑刺たる新童謡の中逸品を、一卷の中三つなり四つなり嵌入して改纂されたならば事實的に其書籍の質量が改善される事と思ふのである。

幼年期（尋常四學年頃迄）口授教式より樂譜教式にまで進む時代の兒童には主として童謡的唱歌教授を主體とす可きは單に予の注文のみでは無く、少しく

目醒めたる新教育家諸彦の心中の響では有るまいか。

此の新興の童謡より出發してそれと共に之れ迄明治十八年あたりから移し植ゑられた唱歌教材に幾多の歲月の下に精選された即ち教授材料中眞の價値に於て千古不磨的名作佳什を一面尊重し、之れを教材の貴重なるものとして飽かず捨てず共用す可きで有ると切言したので有る。よしそれが明治十八年時代のもので有るとしても、名曲は名曲に違ひないのでまさか唱歌に徹が生えて衛生上に悪いと云ふ譯でも無いのであるから、大に一面名曲保存の主旨で無比の寶玉に比す可き佳品等を大切に取り扱ひ、斯の如き作品に於て次代國民の能き音樂的傳統を作らねばならぬ事と思ふ。近時全國各地方に於ける新童謡、お伽唱歌、對話唱歌の普及瀾漫の趨勢は駭く可き程の流れで有つて、一例を擧ぐれば夏期講習會等に地方から集まつて來る教員方或は師範學校の教諭諸氏若く

は小學校教員の方々が、皆地方へ戻らるゝ、靴の中には新作の童謡、對話唱歌等の書籍即ち時流に副へる時代の要求に依る唱歌教材を充溢して歸任せらるゝので有つて、中には幼稚な作詩或は非藝術的音樂並にハルモニイやコントラバントの頭腦の無い作曲者の發表迄をも玉石混淆に持て囃し、新らしがたり嬉し喜んで直ちに教材として兒童等に強ふる、又は作曲者が未成品の自己の僻見や不良的の曲體をこれは新作で有るからなど、兒童に注入する、兒童は要するに御命令の儘に之等の難しい作品を歌謡することに成る斯くなるとその對象物にされる兒童は大に迷惑千萬の譯ではあるまいか。

此際に於ては作曲家及作詩家の道德的自省に俟つて、何うか興國の音樂教育と云ふ事を大に熟慮して頂きたいと思ふので有る。然して現時新童謡に徹底的研究の歩を進めて居らるゝ作詩家北原白秋氏、野口、西條の諸氏、作曲家本居

長世氏、弘田龍太郎氏、山田耕作氏、成田爲三氏等新進の諸彦に更に一段の練磨したる玉作を願ふと共に市井に穩れたる深慮有る兒童の味方たる立場に在る新人に向つて、深く其子供といふ急所を攫み得たる新興國民樂の創作に就て大なる發憤を希望して已まない次第で有る。

五、調子と其教練

『完成された技巧の根本的なものは何で有るか』と質問が出た時に彼のヴァイオリンの覇者ミツシャ・エルマンは言下に答へた、『まづ第一が完全なる調子である』と、『大抵の提琴家は色んな節の組入られた面倒な曲目を弾くが、大方は其調子に於て缺陷が有る、即ち調子を外すことが多い。例へばベトーヴェンの司伴樂の第一と第二の樂章には二重節抑が一つもないけれども、演奏するに

は之より難しいものが無い、それは完全な調子を要するからで有る』と彼は言つて居る。

鐘樓守の撞き出す晨の鐘の音にチラ／＼散る櫻の花瓣は、逝く春の名残を感じ餘韻嫋々聴く人々の心裡を深くひく、夏の夕べのピアノの弾音遠く木立の繁みを縫ふて聴こゆるあたり一家團圓を偲び、神々しき聖堂にパイプオルガンの音色洩るゝを聴く時にエホバの神を偲仰すのは人間天賦の感覺なのである。斯くの如く音の高く低く連続する時に其高低の差を正しく聴き分くる耳覺が大切なることであつて『音楽上の調子』なるものは此の高低變化差別を指す謂ひである。

音楽の骨髄であると同時に其本體である此の調子の練熟が學校音楽教授と誠に緊要至極な事柄であつて、現時の小學校でも中等學校でも中々完全なる調子

に於て奏唱せられては居ないのである、聞く田中正平博士はオルガンの半音に就てまだ其半音の中に四分音と云ふものを發見し四分半音階を編出したのであるが、グアイオリンの手心の有る人士はこの音を容易く發見せらるゝので猶細かに別けて行つたならば未だまだ八分音階等が出來得る譯で有る。それはさて措き學校音楽に於て此の調子を完全に採らせることが前に述べた如く骨髄で有る以上、種々なる手段方法を廻らして會得了解せしめて、能く聽覺の音樂的發達を促進すべく期す可きで有る。學校音楽に於て特に留意しなければならぬのは、兒童學生の心意を音楽に牽引し密着せしむべき手段と其方法である。之れを音樂的感應法と予は命名して居るので『能く聴く者はよく歌ふ』ので有るか、正確巧妙に歌はしめんとするならば必ず熱心に耳を傾けて樂曲を聴き採らせなければならぬ。

此の調子教練の目的を眞に達するには、教室内の管理法其適當を得て兒童及學生の目と耳とを教師にピタリと引き附ける様にする、要するに兩者の意氣が充分に膠漆の様に結着して居なければならぬ。こゝが大切の事であつて教師の説明も範唱も範奏も充分に徹底するかしないかは、この兩者の状態如何にあるのであつて、特に音樂教師は教室内の管理方法の妙が全く行涉つて居らなければ駄目で其手段及方法とが上手でなければ何程能き技術を持つた教師であつても決して其成績と効果を擧げる事が出來得ぬので有る。

靜聽法、唱和法、視唱法の三方法は調子教練の目的を達する手段の最良の方式で有つて、其の中予の考案になれる靜聽法とは兒童生徒を坐席せしめてよく姿勢を整へ各自の手指及掌を以て左右の耳輪を蔽ひ滿腔の注意を耳に集めさす方式がある。(但兩手掌を以て耳輪を蔽ふに當り其れが爲めに胸部を狭めざら

ん事を要す)此方法は特に幼年の學級に比適したもので有る。

教室内に於て兒童學生の注意が亂れたり又は折角心して樂曲を演奏して聽かしむる場合でも喧噪状態に陥つてそれが爲めに教師の範奏唱が徹底し難いのは兒童等の心身活動の心的状態からして其運動が壯んであつて所謂手いたづらに依る事が多く、中々壯んな者に至つては往々教師の目睫裡に有り乍ら、机下に紙片鉛筆若しくは翫具などを弄し、教師の方へは目も向けず隨つて其說話範唱等に耳を傾けない、又は惡戯者はよく目を下に向けて仰いで教師を見詰めて居ない、茲に於て全く手いたづらを止めさせるには、其の自由を暫く束縛する方法を探つて一切の注意を耳に集めしむる様にするので有る。此の方法に據つて時に目などを閉ぢさせて樂曲を傾聽せしめると滿堂閑寂として咳一つする者なく、宛然無人の境かと思はるゝ様に靜肅に成るのであつて、要するに耳覺は其

耳輪の大なる程（中樞の構成にも勿論據るが）聴覺の鋭敏なるもので有るから耳の敏感を補ひ併せて管理法の一手段として、此法を小學校幼年兒童等に活用するときは最も有効で有る事を實驗の上から御勸めする次第である、さり乍ら餘り續けて此の法を用ゐず度々折々が宜しいのであつて本體は普通手を下して膝の上に置き又は袴の上に採つて正視すべきは無論の事では有らねばならぬ。

唱和法とは聴覺を主として聽いて聲音を以て和する方法を謂ひ、樂曲を聽聞したならば極微聲で其音程通りを呼出させる、而して段々其音程を聽き取つて行くに従つて、一層の注意を以て聽き取らせ乍ら強弱緩急を附けて今度は練習をさせるので有る。此際の發聲の仕方は極軟らかな軽い聲がよろしい之を弱聲練習又は軟聲練習といつて、弱い聲で輕ろく歌はしめるのである、そして一曲なら一曲豫定通り出來上る迄歌曲にどうやら纏る迄は此の軟聲を以て唱誦せし

める、而して全部遺憾なく唱ふ事を得るに至つて正當な音樂的聲音を出させるので有る、今一つの能き方法は全部の旋律を口を結ばせて鼻口よりの音。音で歌はしめる事も又非常に其効果が有る事であつて、元來この鼻腔よりのム又はンの音は音樂的調子に於ける効果は誠に多いので主として其音程を遺憾なく取り得る點に於ての其成績は著しく多いもので有るので有る。

此の方式を採用さるゝ方々は必ずや唱歌教授に於て成果を得らるゝ人と成り得る事は茲に保證する處である。

視唱法、とは前の幼年兒童には専ら耳覺によつて音律を教へ之を唱はしむるに有るが、此の法に於ては少しく年級も進歩し知覺も進歩して來たので有るから、曾て耳覺にて得たる知識に基いて、今度は目にて音の差異高低を識別させてこゝは一音なりこゝは半音なりと可視的意識的に明確に唱ひ出さしむる事

ある。視唱を成させる場合には可成樂器の力をかりず、個人^の力に據らしめることを肝要とするので、往々教師が聲を出してやつて兒童等は教師の音程を力頼みに恰も雷同附唱し二者の合唱に成つてしまふのは甚だしき誤弊で有るので、本來の視唱法の主旨を没却した事で有ると思ふ。視唱法の際教師の保つ可き態度は嚴正なる兒童聲音の審判官と心得ふ可きで有る。能くその唱聲を考察して正しき批判と矯正とを掌り、音樂的理想の聲音と音程^{||}好旋律の形成を期す可く努力せねば成らぬので有る。唯其誤まれる個所のみに就て時々範唱を示して之に例はせるので教師の範唱する場合は極々稀の方が宜しい、能く何處の學校でも有る様に餘り度々範唱するのは實に兒童學生の注意力が疎になる計りでは無く、教師もそう餘り度々範唱をすると之が爲めに音聲の疲勞を感じやり切れなものである、範唱なるものは恰も待ちにまつて居た郭公の^一と聲又は谷の

戸出づる鶯の初音を聽く様な感じを與へてこそ、教師の範唱が尊くなり聖くなり注意と興味とを以て迎へらるゝ理で有る、此の外調子教練に關しては肝要な手段が六項有る。

- A 聽音
- B 音程練習
- C 音階視唱
- D 和音練習
- E 新曲演奏
- F 蓄音機利用

A 聽音とは音程及旋律の一系列を耳覺に依つて高低及長短と聽き別けさせるので有つて、今C調なりG調なりと其主調音を與へて置いて、三度五度或は二

度四度六度と云ふ風に交互に樂器の音又は聲音で發音しつゝ、此音は何度か！
この音は何音かと云ふ工合に試みる事もあり、又旋律の一部なり二小節なり三
小節なりを弾き試みて之を筆答させる事なども有る、此の方法は唱歌教授時間
の後などに見計らつて行ふことが肝要で、或時は己習曲などに伴奏を附して奏
し、其曲目を明確に答へさせる等の方法もあつて唱歌教授の時間の前後の少し
のタイムを充て、之の練習を行ふ事は頗る有價値の事なので有る。

B 音程練習 とは甲音より乙音に至る二音間の音程を容易に聞き分けさ
せて發聲させ又は口答させる練習で有つて、最初は稍器械的に流れても多少は
宜しいのであつて (D^ドM^レR^ミF^{ファ}M^ソS^ソF^ラL^ロの如く) 一種の習性的に呑み込ませて
他日の基礎練習を目標とし、再三再四時間毎に鍛へ練つて遂には容易に何時で
も必要に應じて引ばり出させる様にする事が大切であつて、新教授の歌曲内に

含んで居る音程の至難なるものを摘出して練習するのも面白い有價値の事であ
る、歌曲中に含む至難な音程がすらく出來る程なれば、他は一歌曲は何の苦
もなく唱ひ廻し得る事が出來る道理であつて又實際に左様であるのである。三
度音程、四度音程、五度音程と云ふ風に順次に習慣的に系統を正して教へ練つ
て行くのも音樂的に有意義の事なので有る。

C 音階視唱 とは音階の一系列其形式を熟練會得させる方法なので一目して
一音階中の主調音より五度とか六度とかを連続して呼聲し得る實力を習ふ事な
のである、かけ放れた音程を正確に覚え込ませて、何時教師が鞭で某音を指す
場合にも少しの間違も無くキチンと發聲し得る迄に上達させて置く可きで有る
これも最初は前の音程練習の條に申し述べた如く習慣的に鍛へ込む方が其結果
は好いので、教師はピアノ又はオルガンにて最初の音階の主調音を與ふれば、

直ちに Do Re Mi Fa Sol La Si Do と其一系列を正確に發聲し得る迄に充分鍛練して置いて
唯に學校内のみでなく家庭に於ての唱歌にも何れの場合にも一旦正確に鍛へら
れた染み込んだ音階の知識は中々によく固まつて居るものであつて、其骨折り
の効果は骨折る程甲斐が必ず多いもので有る。折々は其形式を變化させたり速
度を早めたりスタカトを附したり強弱を附したりして充分に練習せしめる。
新教授の歌曲提示の場合にも此の曲は何の音階で構成されて居るとか、例へば
茲に(埴生の宿) ^{Ees} の調子の歌曲が有るこれを新教授の場合に於て、此の曲は ^{Ees}
の音階で構成されて第一音より其一八音内 ^{オクターヴ} の音域を以て作曲されて居ると云ふ
風に之を分解して示す、然る時に音階の練習が充分に行き涉つて居るので有る
から直ちに其歌曲を苦もなく唱ひ得るので有る。教師は音階の圖を指示し乍ら
音程を指導し歌曲新教授の豫備的練習を行ひ、教授の効果を一層明瞭に爲すべ

く可く勉むることで、勿論此の際には樂器は成る可く使用せぬ方式で唯トニツ
クを與へるに止めて置くのは此の教練の本體なので有る。

D 和音練習 同時に響く二個以上の和聲的の音(協和音)は吾人に頗快感
を與へる、三個若くは四個の聯合せるものは和絃で有るので三和音四和音等尙
以上あるが、兒童には二三和音以上は複雑で聽き取らせ難い故に三和音位で第
一音から其三音を採らせたり其五音を採らせたりして練熟せしむる事は頗る緊
要の事であるので有る、是の方法は複音以上の唱歌を課する豫備練習としても
大切なる事である。我國人は以前から此和聲的の耳の教養に於て缺陷が有るの
で、これ迄の普通の人々(音樂的教養の無い)は和絃の耳を持たぬどころか、
全く音樂的の耳の教養も無いそれを持つて居らぬ聾者と謂つてもよい位である
から、音樂教育に於て此の缺點に留意し子供の折からこの和聲的の耳を養つて

行く事は急務中の急務に屬する。現代に於ては單音唱歌即ち小さいリードの如きものでも何等か和聲的伴奏を附けなければ承知の出來ない様な時勢と成つたのは相互に斯道の爲めに慶賀すべきで有つて、將來は益々此ハルモニーに就ての研究を要する時なので有るが故に小學教育に於て正確な和聲的伴奏を附けて唱はしむると同時に此和絃練習を勵行して行つて、やがては和聲的の耳覺に於て確かりした者を造る可く教へ導いて行くのは將來の我國音樂の爲めに遠く計畫せねばならぬ大切な事項に屬するので有る。

E 新曲演奏 兒童學生等の是れ迄聽いた事の無い新曲を演奏して聽聞せしめ之は風琴曲でバツハ作の『フューグ』で有るとか之はピアノ曲でベドゥグエソンのソナタの第一樂章で有るとか、之の曲はピアノ曲で有名なショパンのアムプロムブツの中で最も人に知られて居るファンテージーで有るとか、之の曲

はヴァイオリン曲でサラサーテ作のチゴイネルワイゼン（流浪民の音樂）で有るとか若くは之は進行曲でメンデルスゾーン作のウエツディングマーチで有るとか、種々教師が彈奏して兒童學生に聽かしめると云ふ事は音樂教育の振興上大切な事項であつて、又調子の練習に耳覺の教養に資す可く甚大の効果が有るので有るから、時々之の方法を採つて彼等を喜悅させ乍ら導いて行き乍ら調子教練の目的を達する様努力することは最も大切な事柄で有るのである。

F 蓄音機の利用 近來はレコード音樂會等が起るやうになつて來てコロニアやビクター等の蓄音機商に依つてかつて喧傳せられた娛樂的普及は今や一轉して藝術慾に憧がる、人々の争つて或はカルソ一の獨唱を聽いたり、エルマソンの絃音に親しんだりシユーマンハインクのアルトの妙聲に聞き惚れたりする時代となつたのである。學校音樂に應用して教育の目的の爲めに之を一層活用

普及したいものと思ふので、事實歐米に於ては幼稚園小學校の教科に盛んに之を利用巧用して居るので有つて、或は蓄音機のレコードから流れ出づる樂音を伴奏とし或時はダンスに應用し遊戯に利用し教科に適用して居るので有つて、教育的に有價值なるレコードを精選し俗悪なるものは決して之を採らず麗妙な或る効果をレコードの盤面を透して得られんことを望むので有る。我國の初等教育に於ても全國に於て二三ヶ所此の畫策をやつて居る所もあり目今行ひつゝある向もあるので其の効果の良報告を待ち望んで居るので有る。

六、新らしい唱歌の教振り

兎角に我國の教育は形式を尊重し劃一を期し皆同じ様に仁丹の製造でも行つて居る氣で粒を揃へたがる。現代でも頭の古い連中は矢鱈にもつたい振つて多

くの中の校長などになると手取り早く簡易に出来る教法でも其所に何等か重みを附けなければならぬ様に心得て、極端に言へば半紙を一枚數ふるにしても一ツ首を妙に振つてから數へると云ふ譯で極簡單明瞭に出来る仕事に時間を要すると云つた傾向の有るのは事實で有るのである。世には役人氣質などと云ふ一種のものが有つて早く判を捺印すればズン／＼他へ廻せて仕事にらちが明くにも係はらず半日も一日も手元に留めて措いて勿體振つて己れはエライ役人であると云ふ様に心得て居ると云ふ輩も未だ其所所に有ると云ふ話だ！現代はこんな事では管に其事業の能率が擧がらぬのみか、頭の好い青年は間々痲癩を起す等の事が有るので之等は是非々々改造すべき事柄なので有らう。

サテ唱歌教授に於ては予は其形式などを兎や角言つて居る時代ではないと思ふ、横からでも堅からで臨機に兒童學生の心的状態を推し計つて其機先を制し

て手取り早く教へ込むと云つた様なのが宜しいと思はれてならない。これはとり様によつては餘りに極端に走り過ぎるが、聊時弊を矯正すると云ふ心持から出た言葉であつて何時も教授法の原理教育學の原則にのみ捉はれて動きのとれない様な行き詰つた形式のみに拘泥して居る人々に對する小さな反感なので有る。

殊に唱歌のやうな技能の教授の如きは教授者の才能に教才の充分に有る人の教授は簡單であるかの様だか教授法の原則にビタリと適合して居つて勞せずして愉快に其進歩の跡顯然見る可きものが有り、翻つて如何に學藝に精通して居る人でも教才なき人にあつては廻り口説い話などをして、能く人の意識に入る様な域に迄到達することを得ないのみか往々失敗の愚を演ずることが間々あるので、教授の才能なるものは一種の天稟の技術であるので有る、斯くの如く論

じて來ると教授法の巧妙拙劣の岐る、所は、人々其個性の所謂前天性に依ると云へるが、教授法の原理を審知し其手段方法を考究して後に教授に着手せざるに於ては、如上の天才的教師も往々傍目から見られて教路を迂回する憾を懷かれて餘計に骨折り損をする事が多い。故に孜孜として教授法の理論と自己の教才とを巧みに結着して、巧妙な技法に精通せらるゝ様心掛くるは肝要の事柄である。されば『鬼に金棒』の諺の如く他の追従を許さざる妙域に透達することを得るので有る。

嘗て外人經營の一學校を訪問した時に予の名刺を見て態々女子校長殿の案内で其當該教師（米國婦人）に紹介をして呉れて丁寧親切の待遇を受けつゝ唱歌教授を參觀した事があつた。君は（A distinguished Actor）で有るから教授を見られて恐ろしい』と云はれたので思はず赫顔になつたのであつたが、先方の教

師もこちらが學校音樂の専門家であるとの見地から、區々たる教授の段階的形式を採らず極々生粹の處を見せて呉れたので有つた。それは音階教練もやらなければ音程視唱もやらない發聲の練習もやらないで、直ちにピアノに向つて當日の教材で有る歌曲の主調音トニフと其三音を出した丈けで有る。學生は腰掛けた儘で各自教科書から (Butter) の曲の頁を揃へてソプラノとアルトで極々弱らかに唱ひ出す、そして拍子を各自取り乍ら曲は次第に進んで行く、偶々音程を間違へて笑ひ乍ら直して後から追つて行く生徒も有つたが、教師はタイムや音程又は強弱に就て其箇所々々で一寸訂正的の注意を與へるだけの骨折り前後五回程歌つてサテ稍出來上つたので今度は一同起立して軟らかな麗しい聲清らの聲でサモ嬉しさにサモ愉快さうに歌謡するので有つた。參觀の予にも前に一冊のブックを渡されてあつたのでツヒ釣り込まれて共に歌ひ連れたのであつた

が、其際の教師のピアノ伴奏の奇麗な弾き振りとタッチの軟らかな艶美には思はず聞き惚れて久敷茫然たるものが有つたのである。成る程手懸け馴れた自己に謬著した曲趣はこの位同化し結合するものかなと心で讚美した程で有るのである。駭いたのは來る組も教室を去る組も學生は敬禮一つせぬブイと帽子を冠つて出で行く。(後に予は其の教師に注意したので我國の學校音樂では禮儀を正すと。)これ程簡單でこれ程進歩的でこれ程効果を擧げて居る(勿論之は一例で有る)我國の學校音樂に於ての七面倒な教授、形式に捉はれた教授、唱歌の聲色を消殺して了ふ程の頭の痛くなる様なピアノ伴奏の音色、口八釜しい説明振り、入りもしない注意など、ヤレソレと行ふに比較して全く一段も二段も垢抜けた教授振りには誠に見て居て心地が好いのみか實際斯く有らねばならぬと深く感じ入つたので有る。

我國學校音樂の先生が其教授法其教授振りを見て基本として全く模倣して居るのは宗家の東京音樂學校の教授諸氏の形式方式か、さなくば高師附屬あたりの教員方を真似居るので、(ソレ以上は無いので)音樂學校の教授諸氏など元來音樂の技術上の指進批正を事として居るので教授振などと云ふものは全然下手なので有る可き理で、敢てサウ説明も入らなければ教育學も入らない、教授法も敢て入らないと云つた様な實際なので、誰れが教へても二分音符は二拍四分音符は一拍で有と云ふ様な嵩たかを括つた考へで居るのは事實であるから是非も無い。

茲に新しい唱歌の教授振りとして説く所以は千變一律の現在の記録から稍脱進して其極り切つた形式を打破して、各種の方面から研究を進めて例へば歌曲の前に必ず音階視唱や發聲や音程教練を定まつた行事の様に行はなくとも

教授の中途でも終尾でも臨時にでも其必要に應じて施行する様にし、餘りに分りきつた説明等も成る可く簡略に取り扱つて、今一步教授の内容的方面に力を入る、方が好くは有るまいか、形式倒れや説明倒れ!の教授、唱歌教授で有るか字句の解釋教授で有るか國語の教授で有るか又は圖書の教授で有るかと云つた様な氣分のする教授は、最早時代が許さぬので有つて音樂科の内容に包括せられた樂的趣味の涵養に資する言を換ふれば音樂をもつと能く味はせる方法が大切で有るのであると思ふ。

學校音樂家の中には随分多く天才的な人もあり頭腦の確かりした人士も有るのであるから、常套の形式を打破して進みつまり殻を破つて自家の手腕を振つて改造して行つたならば、誠に國の音樂科教育の前途の爲め祝福す可き事と思ふのである。

教授には一面から見て其教授の好氣合を必要とする前に述べたる如く教授者と被教授者の氣合がしつくり接合しなければ好き教授は出来兼ねと思ふので要するに今寫眞師が一つの撮影をせんとする場合に、其被撮影物がむきが悪るかつたり形體がわるかつたり位置が悪るかつたりすると思ふ様に寫せるものではない。位置も姿勢も氣合も充分に整つて居るとする、とバチンと心地好く撮影がすんで然して又其撮つした成績が好いのであつて茲に立派な寫眞が出来上るので有る。此の心理上の對象者が學校音樂では兒童及學生である、兩者の意氣が充分に合つて居なければならぬ。この現象は俳優の甲乙にしろ、唄ひ手と三味線の關係にしろ皆然りであるのである。

靈感に満ちたる刹那に吹き込んだ音樂的の感銘は其の人の一生の音樂的感化の主たるもので茲に特別の力を生じ特殊の薰化が有るのであることを附言して

置く。

七、音樂科教室の改造を望む

萬能之を神なるものと名附け、美妙の化神は時季に於て之を春といふ、春は實に神の藝術の凡らゆる作品の中を裝飾すべき一種の序樂である。

かの花咲き鳥うたふは此の管絃樂の微妙なる旋律の或る一齣の實に僅に過ぎないのであつて常に憂に沈める人、世の不幸に泣くの人、不平勃々の人、悶えある人、一たび此の優しき春の女神の微笑の力に觸るゝ時此の温容に接するの時、光明を夢みて途の希望を叫び復活の力を附與せらるゝ、この春の女神の本體は何かそは音樂と稱せらるゝ大藝術の別名で有るのである。

吾人の耳朵は素より美なる音の喜ぶべきを了解して後之を傾聽するのでは無

い、美妙なる樂音旋律及調和の音が嘯々耳に傳へられて響きを聴くが故に心理的に之を何うしても聴きたくなつて遂に美感の琴線に觸れ心耳を澄ますに至るので有る。斯くの如くして後凡らゆる人心に音樂と云ふものゝ感銘を與へて、茲に生涯忘る可からざる連續性を帯びたる快感の印象を與へて美的性情の艶麗なる作用を喚起せしめて、人生最大の靈性の顯著なる品性陶冶を主掌する力強さが發現されるので有る事は、之は音樂と云ふもの限りの特長であらねばならぬ。

學校に於ける音樂教育は平常に於て樂的趣味の向上を計つて、不斷に優雅善美なる音樂を聽聞せしめ歩一步美に對する感受性を鋭敏ならしむるに力め、日常に於て美情に豊たかなる事物に接觸せしめて其の物より美の感能を感受す可く、常に其の装置と形式方法とが教育的に發案されて又具備されて居なければ

ならぬ。故に音樂教室なるものは音樂を演奏し音樂美に依つて人生に必要缺く可からざる諸般の美的性情を培養する、教養する、實習せしむる神聖極りなき一大靈場で有ることを忘れてはならない。足一步其音樂教室に臨まんか身心爲めに一種の美感に打たるゝと共に、室内の構造悉皆美的裝置美育の目的に適ひ彩光、通風、整頓、裝飾其の有らゆる感じが美的に且教育的に有價值でなくてはならぬことは勿論である。

進行曲の音響心地好く穩やかに流れ兒童學生の座席する咄嗟早くも美興の物々たるもの有つて存し、眼に入るもの皆美感に充滿せる構造が先づ第一初程の要件とするのである。然るに全國に於ける現時の學校設備中（就中大切なる初等教育ブリーマリースクール）で眞に斯の要領に叶つて居る學校は幾ばくも無い、其學校唯一あるべき美育教室の設備に缺けて居る學校が甚だ多いので、應

接室などは大分に金をかけて造つて有るが音楽教室などは誠にハヤ申譯的に唯有ると云ふ名のみ所が多いのは比々皆然りであると云ふ實際は誠に此の大御代に於て驚く可く解す可からざる事柄であつて、現今教育界に於ける一大缺陷一大謬見であると喝破して憚らぬ事は誠に痛嘆す可き事柄で有ると云つて差支ないのである。それでも大分改良されて來たのだが現代の學校音楽教室の實際は普通教室より概して其設備が悪い、中には音響の關係から厄介物視する如く遠隔し、薄暗き教室や便所の隅の臭氣漏洩教室、塵だらけの破れかゝつた劣等教室などを充當して居る向が多い、此等は未だしも或る縣下などは全然之れ無き學校すらあつて間々借家貸間の様に講堂の僻隅、又は雨天體操教室の一部などに佗住居の嘆を怨嗟する教師の言を聞いては一掬同情の涙を禁じ得ない、ピアノオルガンを抱いて或はヴァイオリンを携へて時間々に、彼の盲目の朝顔が

革の破れた三味線を抱へて宿屋々々の泊客に「露の千の間の朝顔や………」と、歌謠しつゝ廻り歩く哀れさを大正の今日やつてぐるぐの持廻りは、考へやうに依つては一つの詩的かは知らぬが日々の誠に耐へ難き事柄なのである。斯くの如き教室の設備では如何にしてか能く人生最高の美的性情の涵養を掌る事が出来やうか、如何にしてか其目的に透達啓沃するを得可きか、極言すれば如上の如き教室にては斷じて美育を掌る教室で無いのみならず寧ろ音楽美を破壊するに近きものであると云ふ事を高唱主張し、學校音楽教育は必然的に其學校最上位の教室に於て取扱はれ可きもので有ることを論じて机、腰掛、窓飾り、等に至るまで審美的室内裝飾を特に装置すべく兒童學生等は之等に據りて美感を教養され感受され音楽美の感化と兩々相俟つて斯の科の本來の特性を發揮し國家音楽教育の豫期せる目的に到達せしめんことを世の學校管理者、當局者、

教育家に向つて懇請して已まない次第である、と同時に學校建築の最初に當り、音樂教室の設計に注意し音響の工合、音の他に洩るゝを塞ぐ構造等を考究して音樂的に設備されんことを世の建築家に切に願うて已まぬところである。

八、學校音樂家本質の改善に就いて

凡何の學科を教授する教師でも平常に其受持學科に就て充分の下調べと常に堅全なる新説若くは日進月歩の實社會の要求上より學科の見地に於て、不斷の修養を積んで其學術技藝に忠實なる僕たるもので有らねばならぬと思ふ、就中音樂科の如き技能科の教師は現代の音樂界の實狀態と平行進行する様に日々其準備を要するのは決して間違ひの無い意見であるのである。

『飛鳥川昨日の淵は今日の瀬』であるとか、或は『世の中は三日見ぬ間に櫻か

な』で此の平凡の比喻が恐しい意義の存するところで、昨年迄は新卒業のバリ／＼先生で有つて日本が生んだ偉大の音樂教育家で有ると人も許し又自らも然か思ふて居たのに、二三年にして其意氣衝天の慨か少しく衰へて來て今年では自然と實社會の要求から遠ざかつたり、何となくボンヤリして來ると云ふ事實は中々多いので有る。先年迄はつひ子供扱ひにして居つた人が今では立派な堂々たる大音樂教育家の實力を持つて來て、ウツカリすると自分が凹まされる恐れがあるので、遽かに敬意を表すると云つた工合で此の事實は自他共に同じで有ると切に感ずるのである。

故に自己の修養に古い人は自己の改善に就ては恐れ懼れて深く自省ありたいものと思ふ、頭の髪の毛をイヤに延ばして蓬々とし、何時でも喪服を來たかと思はれる様に黒いネクタイを喪章のやうにブラ下げて、天下の音樂家は自分一

人で脊負つて立つて居ると云ふ様に大道を濶歩し歩らく先生などに向つても、まづ其容貌などは何うでも音楽とは何等の交渉もないのでモツアルトならモツアルトを氣取るのは能いが、夫より第一に心懸くべきは己れの音楽に對する使命と其技術なのであると切言して上げたいと常に思はれる。予は現代に於ては學校音楽教師の音楽の技術は今より二倍にす可しと以前から叫んで居るので、是は小生が切に感じたる理由があつてから主張して居るので、丁度現今の中等教育の音楽教師は現代では小學校の唱歌教師に適當なる技能にて、中等教育の生徒それ以上の學生には其の程度から現時東京音楽學校の教授諸賢程度の技術を最適とする、此の位の技術が無いならば其の教官の指導は決して其當を得て居らぬのでは無いかと切實に感じてならぬ、此の様な實力と權威とを持つた時代とならなければ未だ我國の音楽教育は決して振はぬのみか時代の進歩と比例

ないと言つても差支はない。

そして現時の東京音楽學校の乙種師範科は明年あたりから廢止してしまつては如何と考へる、之は決して誇張的な言葉では無く音楽教育の振不振の問題から切言するので有る。

東京音楽學校などの重大な使命で有る仕事の一つである弘く舊卒業生を三年に一度五年に一度一定の時期に東京へ招集（現職のまゝ）して三ヶ月なり五ヶ月なりの改造をやらせる、順次に色揚げをして又赴任せしめる、これが一巡したならば全國の音楽教育は大に改善さるゝので有つて、丁度陸海軍の軍人が現職のまゝで海陸大學に入學する如くに方法を講じたり、其他の便宜なる事で随分種々なる改善事項が出来得るので有るが、餘りに其様に立ち入つて論じても悪いからこれは是の邊にして止め置く。學校音楽家は日常現代に於ける音楽社

會の實狀を知悉し音樂に關する内外の出版物に眼を注ぎ、又は斯科に關する學說を傾聽し或は音樂に關係ある内外の雜誌を購讀すると云ふ様に有つて欲しいと思ふので有る。然して一面に於ては音樂の實科即ち實際的技術を倦まず撓まず練習することは音樂教師の生命であり又誇りて有つて大切至極の事に屬するので有る。此の外學校音樂家は新刊の良教育書や心理學書其他常識的書籍其他の斯界定期刊行物などをも通覽せねばならぬ。又品性の修養に就ては之れは人生最高の目的で有るから人の人格的教養を掌る音樂教育家である以上取りわけ絶えず修養が無ければならぬ。特に未だ世人は音樂教育家に對して一種の癖見を以て望んで居つて時に種々なる迷評異聞などを蒙る場合が尠く無いので、常に克く品性の修養を期し常に人格の高潔崇高を維持せねばならぬ所で有る。次に前にも述べたる如く風彩容貌は平常に細心の注意を拂ふ可き事で或は豪

傑流になつたりトモすればいや味の有るハイカラー流を以て目せられたり、又極端なる人は仙人然たる風彩に成り易いことが往々有り勝で有る。之れ等は何れも誠に感服に價せぬのであつて、日常『常識有る温容のゼントルメン』とでも評價す可き風貌を備へて、矢鱈に一寸した事にでも怒つたりブツ／＼不平を並べたり若くは悲觀的に陥つたり、等爲すべきでなく要は御國の爲め、國家の音樂の爲め、次代國民の樂的趣味養護の爲めと分すやのよし校長や當局者等が間々有ることがあつても、其等に拘泥せず雅量の氣象を以て愉快に斯道の爲めと、同職相互に一致協力して勤めいそしむ其天職を全ふするが宜しいと考へるので有る。

九、西洋音樂趣味の教育的普及

西洋音樂演奏會に行つて其曲目の一つ一つに對して相當の理解を以て聽き即ち本當に能く聽き別けて『あゝ今日は實に面白かつた!』と云へる人はマア日本國中に何程有るで有りませうか? 其多くの専門家の中でも充分分りもせぬのに分つた様な顔をする人と、アレ位分らなければならぬと無理に力むで虚榮的に分つた様な顔をして居る人が多い、まして數多き曲目を素人の人々が一々了解して其趣味を明かに知ると云ふ事は不可能の事である。

然し凡そ生きとし生ける人間は音樂のやうな優雅艶麗なる藝術美を聽いて何人か之を厭うものが有らう、生れ乍らにして能く音樂の感受性を承けたものであるから何人と雖も皆音樂を愛好する念慮の有るべきは當然である、蓋しもの

趣味とは第一に其ものを了解してから起るもので度々耳馴れた曲想に對しては其感じが強く多く起るので、随つて之を嗜好する様になり之を尊重する様になり、それから趣味の量が増して來るので有つて、例へばベトーベンのムーンライトソナタ(月光の曲)などは其傳説を聽か無いで不用意に聽いたならば中々其曲想が分り悪いのである、アノ貧しい靴屋の盲目の少女とそして荒れたる家と壊れかゝつた古型のピアノを弾じつゝある作者とを思ひ浮べ、何る程今の音のあたりに月光が皎々と光を放ち偉大の感興が起りつゝ有るので有らうかとその想像に附てかつて文章などで感じた悲しい心から、感傷的な氣分になつて自然と泪ぐむと云ふ風で有つたならばもうそれで充分なのである。

極々の最初は此の曲は雄大な氣分に感じるとか繊細な弱い音に感じるとか、センチメンタルで有るとかを感じる丈で宜しいので、擴大なる自然の感情の表

現である音楽は、中々複雑なもので有るから樂的趣味の最初の出發點は極々簡單なものからスタートして行けばよいので有る。西洋音樂趣味の分らない人々は其程度に依つて出来る丈音樂の眞似をする事が必要で、其の模倣が遂には一種のオリヂナリテイを形成して行く様に成るのであつて唯に音樂のみに限られず洋書の如きものも殆んど九分通りまで眞似から出發して行くので有る、それが長い時間の經過後遂に趣味を持つと云ふ成効の域に入るので有つて、その最初は模倣と云ふ丁度猿の様な事をするのから出發して行くので有る。

現代でも世間にはまだく、舊思想家が有つて『西洋音樂の趣味は全く了解出來ぬ』など得々然と他に誇る人が有るのは困つたものだ、そう云ふ人は西洋料理（佛蘭西上等料理などでコックの自慢になつたもの）を食べてこれは少し辛くて不味いと吐き出す人々で有らう。

學校音樂などでは其の當該學校の校長若くは管理者に於て音樂の趣味が全然無かつたり了解が無いとするならば、それは一大事の事で何うしても音樂科の成績が擧がる譯は無いので有る。不幸にして是等の事に際會した學校音樂家は先づ其の人々の蒙を啓いてやる事から掛らねばならぬので、度々之等の人々を音樂會に誘つたりピアノを聞かせたり或はヴァイオリンを奏して聽かせるとか或は蓄音機のやうなもので漸次に導き寄せるとかする方法を探る可きであらう音樂のやうな技能學科は再三再四熟練の域に進んで益々其妙趣を現出せしめ其効果を全うす可きものであるから、常に教授したる歌曲歌詞は充分の練磨を加へたる後機會を捕へて之を公表し、漸時に精神の奥底に其の美を彫入して行つて教育上の効果を全うす可きである。之に就ては學校内に於ける學藝會又は唱歌會音樂練習會、保護者會、母の會、母姉會等の集會を期して度々音樂唱歌を

奏唱し獎勵し其成績を公表して、學校から之を外に誘ふと云ふ工合に一つは斯科の進歩發達を企圖することに努め、一つは現社會に日を逐ふて西洋音樂趣味の布衞を計ることは急務であるので有る。現時は段々各地方に於ても其校卒業同窓生の發企等で音樂會を開催して、中央の樂人等を招聘し盛んに催す所が有つて大に樂的趣味の普及に對して結構なる事であると思ふ。又東京音樂學校職員生徒の修學旅行兼出張演奏等も近年各地方に於て開催せらるゝので樂的趣味の普及並教育的に之を布衞して行く可き甚だ宜しい企圖で有ると慶賀せざるを得ない。尙進んでは官費校費を以て全國至る所に音樂會を開催し時に中央から樂人を出張させ漁る人々や畠に忠實なる人田を耕す人、草薙る乙女牛飼ふ幼童に迄此の西洋音樂の喧傳を行つて、一日も早く我が國に堅實なる果が結ばれて好き國樂の基礎を作るべく努力して進むのは緊要なる音樂的大事業で有るので

有る。

10、西洋樂器の一般的普及

初めて女の子が生れた!! 一家大喜びて之を祝福する近親朋友争つて相互にお祝ひの品物を贈る、サテ此のお嬢ちゃんやんがやがて學齡に達する頃には、將來の音樂教育に就て其御兩親は日本在來の音樂Ⅱ即ち琴曲三絃を選ぶ可きか? ピアノオルガン又はヴァイオリンを選ぶ可きかの問題が起つて來るので有る。

學校へ入學して直ちに子供は西洋音樂の基本を唱歌科と云ふもので植ゑ附けらる、家庭に歸つてはピアノもオルガンも備へて居ない、其の家庭で唱ふ唱歌の音程が間違つて居つても調子が外れて居つても、母親の御方を始め家内中が知らぬ顔の半兵衛さんで濟まして御座る、子供の唱歌の成績が乙でも丙でも何

アに唱歌などは何うでも宜しい、と我れ關せずの體度で居らるゝ御兩親が有つたとしたならば、誠に其のお嬢ちゃん不幸のみではなく、西洋音楽と云ふものから見たならば其家庭に丙とか乙とかを評語に差上げなくては成らぬのである。

或教育學の大家で有名なる某教授の長男の方が小學校で第一學期唱歌の成績に丙を頂戴して家へ戻られた、其所の令夫人は流石に夫に連れ添ふ賢夫人丈に顔色を替へて目には涙を湛へて夫の前に進み寄つてサモ落膽の體で申されるには、『あなた！此の子には將來の教育方針として充分語學を鍛鍊させなければならぬのにア、望みの綱もどうやら……』と、さめざめと泣かれたので主人も驚愕し直ちにお子さんの手を曳いて受持の唱歌科の先生（普通學科の先生であつた）を學校に訪ねて耳覺の良否を尋ね、音樂的に聽覺をもう一度試みて貰う

事になつたので有る、所が試みた結果別に耳覺の方は何んとも無く成績考査の際にもよく歌ふことが出来なかつたのと知れ其教授も稍安堵の胸をなで下して歸つた、直ちに次の日曜日には銀座通り竹川町の樂器屋に赴いてピアノを壹臺買ひ求めそれをやがて子供の室に備へ附けて、母御が日曜日には必ず學校で習つた唱歌の復習をして漸次にその成績を甲に成らしめたと云ふエピソードを親しき友さから聽かされた時は、非常に愉快に聞きなされてサモ有る可しと其教授の家庭幸福を蔭ながら讚美したのであつた。

近時西洋樂器の家庭に於ける需用は甚だしき勢を以て多くなつて來たのは事實で有つて、中流以上所謂中産階級以上の家庭に於ては子女にピアノオルガン又はヴァイオリンを習はせると云ふ事も次第に其數を増して來て、現今では少しく家並みの揃つた町を夕景などに散歩すると彼所でピアノこゝでヴァイオリ

ンと云ふ風に、漸次に音樂的ホームが窺はれる機運に際會して來たのは斯道の爲め誠に喜ぶべき現象である。

何うしても我國家庭樂の將來はこの西洋音樂の瀾漫といふ事は必ず期して待つ可きであつて、今更三味線音樂で『嵯峨やおむろ』などの時代とは遙に遠くなつて來たので有る。

縁日の人だかりを窺ひ見るに流行唄を鬻ぐ讀賣兒でも時代はヴァイオリンの音色を要求する、店舗に客を待つ小店の手にはマンドリンが有り、自轉車使の小僧さんの口からは絶えずハーモニカの音色が流れ走る。

氣のきいたお祝ひの贈物などにも近頃は大にしてはピアノ小にしてはヴァイオリンの贈り物が流行するとか聞いた！此の時代に成つて來たので、吾人學校音樂に携はる者は大に一面之に力を得て、自己の天賦の職業に就て大に自覺し

一面には成る丈西洋樂器の普及と云ふ方面からも、家庭に良好なる西洋音樂の入ることを助けて、文化的的藝術化的家庭を建設することが學校音樂社會音樂彼此の連鎖で在つて、社會の風教にも音樂の教育的普及にも共に其効果が有るので今迄の様に西洋音樂は學校内の音樂に限り家庭に歸れば別の音樂を持つと云ふ二重三重の音樂的教養では無論斯科の完全なる普及改善は望み得られぬ次第で有る。

全國の津々浦々山間僻地の小學校さては家庭等に於てもピアノ等を備へ附けて美しい伴奏の音色が波の音と調和し森のこだまと相響く様になるのはさて向何年位立つ頃であらうか……………？。

一一、學校唱歌と獨唱

兒童學生其の個人の把持する音樂可能力を一々啓發して之を指導誘掖し、善良なる模範正確なる訂正指示をして、教授を了つた歌曲は常に復演的熟練の度を重ねて後各自の懷有物となさしめるのが技能的教科の主趣で有る、と共に非常に愉快なる藝術的個人教養の貴き所で有る、故に能く個人的習熟を重んじさせ大に獨唱を獎勵して獨立的に唱謠し得る様導き或は企畫すべきである。

嬰兒生れて十數ヶ月を経るや其口未だ言語の何ものかを發する方法をだも知らざる時、喃々聲音を上下し其の情を歌ふが如きを見る是れ赤子の心的狀態已に一種の獨立的歌謠を爲すものであつて、長ずるに及び漸く他人の歌聲等を模似して朝暮之を口にし反覆するのを屢々聽くのである。之れは已に獨唱と云ふ

聖なる純なるもので普通教育に於ける唱歌教授にあつては、此の獨唱の分量に就て當該教師は熟々思ひを致す可き研究すべき所がなければ無らぬ。一般の唱歌教授の方法に於ては常に合唱が多く用ひられ、獨唱（個人唱）の教練は誠に尠いのであつて、唯稀れに用ひらるゝに過ぎぬ、この理由は時間的關係が餘程あつて多くの兒童學生に一々僅かの時間内に於て獨唱をなさしめ、夫れを指示訂正して行くのはとても時間が許さぬとさう言つてしまへば其れ迄であるが、合唱なるものは元來獨唱をなさしめ得るに至らしむ一の手段に外ならぬ、合唱のみにては真正に各個人別に唱ひ得るに至れるかを見分けることが出來ぬのである、技術は如何にしても個人別に修練せねば其良結果が擧り難い、これが教授者の工風鹽梅を要する事で、どうかして常變的の教法を改善して稀に用ひらるゝ獨唱の教練を多く用ひ、多く用ひらるゝ、合唱を稀に用ひたいものと思つ

て已まぬ。

現代に於ける唱歌教授の内容に於て最も等閑視せられて居るのは『樂曲を活躍させぬ事』であると言ひ得る、それは音樂の死活を左右するのは一に樂曲内に於けるムーブメントでそれが緩急強弱に生きて居ねばならぬ、之の法が疎略に取扱はれたらば決して音樂唱歌の眞趣を現はす事が出来得るものでは無い元來樂曲とは之を分解する時は幾多の樂句の結合體であつて、其一齣一句が連合されて一の段落と成つて居る、其一樂句さへすでに何等かの強弱を含む譯であるに依り、まして一段落一樂曲中には其要所の各項に必ず特別の強弱緩急か附せらるべきで、エキस्पレッションの活用と云ふ事は音樂的習練の最上なるものと云つて差支無いので有る、人心を音樂に誘致する精神から云つても左様有らねばならぬ、兒童用の小學唱歌等でも此の手加減が必要で、容易なる曲

想で有るからと云つて所謂一本調子で一種の韻文朗讀化し終つてはならぬ、さりとて極端に附して一種のイヤミに成つても困るこれは誠に無つかしい問題である。

普通唱歌集には *f* (フォルチシモ) の記號は附けない様に願ひたい、さなきだに兒童合唱の實際は共鳴的に大聲叫聲に陥る弊が有るので、此の記號 (*ff*) は現は金庫の中にも入れて藏して置き、其替りとして出来得可くは *p* の方で填補して *pp* までを附けたいと望む。この時には實に消えて行く様に今一步云へば微なる聲が出て居るか否かと思はれる位にして、*f* で或程度の強さに引き出せば充分である。然して唱歌教授の眞趣は曲以外、歌以外、強弱以外、に或る者 (作者獨特の精神) が有る、この或る者の特性を活躍さす可きを失つてはならぬ之れは重大なる要點で、能く個人唱即ち獨唱に於て此の要訣を熟練せしめて要

領の發揮に力を容るゝ事は大切至極な事と云ふべきで有る。

一一一、(タクト) 指揮法に就て

拍子なるものは音樂上に於て其樂曲固有の性質と一定時内に於ける強弱を明示するの謂ひであつて、實に音樂上の死活を掌り節調の基本たるべきもので有る、拍子の主要なる點は多數密集せる兒童學生等をして合唱を爲さしむる際の如き能く歌曲の拍子を一齊にし其混亂を防ぎ且抑揚強弱を明示するにある。

拍子に關しては古來東洋に於ては殆んど學說無く單に兩たれ拍子、扇拍子等と稱へて其多くの進行は二拍子を繰り返したものに過ぎぬ、間々三拍子に類するものもあるが之は甚だ僅に過ぎぬ。西洋に於ても中世紀の頃から漸次拍子に就て論じた位であるから完全に秩序を整へたのは極近世の事である。拍子上の

感念を明示し其れを確實ならしめ其特有的性質を知らしむるには(Flick)を振る即ち指揮棒を採ることが就中其要領の最たるもので、短鞭(それは持つに易い構造)で可視的に右に左に上下に打振つて其拍子を正確婉美ならしむる方法である、其の一舉一動よく緩急強弱の眞意義を知らしめ得て、指揮者の熟練巧妙なるものは鞭一本の中に多人數の注意を占有することが出來得るので、拍子教練の目的を充分に達せんには此法の研鑽を大方の人士にお勧めする次第で有る。

指揮法は勿論教授せる歌曲に兒童等の熟練なる程度に進みたる後に於て効用あるもので、歌曲最初の新教授の如きは之れに依るも其効果少きもので有つて歌曲の複習的教練又は歌曲の至難なる箇所箇所の練習は之の妙法を用ひて成效されんことを望む。

嘗て東京高師の講堂に於て東京市内男女教員四千餘名の大集會が有つた、市

長後藤男爵は世界的の鼻眼鏡の黒縁の中から、慧々たる眼光を光からして一同に向つて一場の演説を試みる爲めの召集で有つたのである。

予は當日のプログラム中の序君が代合唱（二回）の指揮者として演壇の前に起つたので有つた、何にがサテさしにも廣き大講堂も階上階下人を以て真に埋まるとは是なんめり、テーブルもチェアも見ゆればこそ唯目に溢るゝは人の顔と頭の圓形輪廓のみなので有る、百や二百三百の人では無し、四千餘名を二回に分けたる人數我首都教育界の權威者揃ひで有るので有るから、實に其壯麗偉觀は筆にするを得ざる程で一種崇然たる光景胸に逼つたので有つた。予は指揮棒を下げ持つた儘群集の氣合の移る迄所謂謹慎用意（Circumspectly）の姿勢を採りつゝ有つたので有つた。

刻一刻人心吸收の一機會を捉へつゝ有る中に飄然として決然タクトは空を高

く指した、群集は意氣を静めて一呼吸にして *re Do re mi* の樂音は指揮棒の先よりピアノにフォルテに迸り出づるのである、伴奏は全然無いので有るから勿論エキスプレッション以外に靈感的神人一致の妙境を祈らねば是れ等の大人數には靈覺を以て指揮することを得るので有る、曲は愈々進んで千代に八千代のフォルテは實に大講堂を振駭せしめたかの如く、巖となりてのメツオピアノは一轉して緩やかに漂ふので有らねばならぬ。そして苔のむす迄 *mf* より *pp* 又は *p* に終尾するこの國歌は感銘的な階調と頗るインスピレーションに富んだ緩急強弱が保たれべきで有る、而して終結のリターダンドは是又餘程タクトの加減を要する所で有つたが、如斯にして苦心慘膽の餘り自信ある國歌の指揮を心地能く成し遂げたので有る。

指揮棒は平素儀式に限り使用するものは象牙製の極細き輕ろき製作になりタ

タクトの末梢には銀環を嵌めたるものを用ふるのであるが、此際には之を探らず木製の彼のユンケル式と稱する其價は驚く勿れ金參拾五錢の新品で有つた、其れを木賊に掛けて磨き上げ殆んどワニスを磨り去つて、眞白き木の色を現はしたるものを其の儘使用したので有る。

これは茲に特筆する所で有る眞純にして聖なるタクト棒それは未だかつて人の手にせざる（製作者のみの）ものを我が大和民族の大本であり大宗家たる神に在ます天照太神の神棚に供へて、之れに切り火を點じ燈明を捧げてそれを純白なる布に包装し前夜神前に置いたのである。之の眞率にして敬虔に富みたる精神上の凝つて神感に滲たさるゝ時、如何なる多人數の合唱にても遂に意の趣く如く思ひの儘に指揮するを得可く、又其の指揮者の靈覺が精神上を透して力強き意志と成り大勇斷となることは特に明記する所以である。敬虔にして神感

に戦くが如き純眞なる人の心其れは世の指揮者の必ず守る可き活教訓であると云つて差支は無い。

予の感得したる指揮者たる精神的状態は斯くの如き純なるもので有らねばならぬと思ふ、左に項を分けてその指揮者たる心得を擧ぐれば。

1. 音、樂、的、優、秀、の、耳、と、熟、練、な、る、氣、合、に、富、む、事、。
2. 一、瞬、に、生、き、よ、そ、は、生、命、な、り、。
3. 敬、虔、と、和、ぎ、に、富、め、。
4. 熱、と、力、に、満、ち、よ、。
5. 指、揮、有、つ、て、己、れ、を、忘、れ、よ、。
6. 神、を、呼、べ、而、し、て、其、至、大、の、權、力、を、得、よ、。

以上はタクト指揮法に就て世の同僚に進言する感じと氣分の一端で有る。

一三、音色の研究

凡そ音^ニ樂音を區別するには大要三種の要素が有つて、A 強弱 (Intensity) B 高さ (Pitch) C 音色 (Timber) の三種に區別さるゝので有るが、同じ高さの音であつても音色に於て異なつたものなれば能く二音を識別することが出来る、例へば琴の音とオルガンの音とはたとへ其高さが比しくとも、音色の上に於て異なるもので有るから容易に之を識別することが出来るのである、之れを音色の相違と言ふので有つて人聲^ニ人の聲音に於ても甲乙丙丁と十人百人皆夫れぞれ相異つた聲音を持つて居る事は人々の知る事實であるが、今茲に音色の研究に就て發表せんとする所は一般の音樂家學校音樂家にとつて最も關心すべき重大の事であるので、音樂家は先づ何ものよりも先に音色の研究と云ふ事から

スタートして行く可きものと思はれてならないので次に其の要點を擧げて見やう。

音色^ニとは平易に之を言ふたならば、音艶—幅音—共鳴音—陪音—附隨音—等を一括して丸めた如き一全音の謂ひであつて、能く音樂を演奏し試彈し練習する時に於て常に心懸く可き唯一の寶典とも稱す可きもので、如何にしたならば能く其音色の妙味を現出することを得可きか！と研究する謂なのである。

快美艶麗なる美音所謂銀盤に金鈴を轉がすてふ音色は、例へばそれで唯一つの音階を弾いたのみでも、既に已に一個の好音樂と聴きなさるゝので有つて、豊饒なる美音を現出する音色は、ピアノの一つの鍵を打つたのみでしかも其刹那早すでに善良なる樂音を現態し、聽者に無限の快感と其音樂的效果を得せしむべき特種の力を持つて居ると言ひ得る。

今茲に破れかゝりし一つの古型のピアノありと假定する、之を彈奏する樂人が音色に就ての平素深き考へと其知識とを持つて居る人ならば先づ之れに指頭を觸るゝ先に考一考して、其アクションの關係やタッチの度合ワイヤの強度鍵の工合などを考察して能く其古ピアノの全能を現はす可く彈き試み、やがて徐々に指頭の硬、軟、を加減して彈する時に、多年の破れピアノも化して新型の優良なるニューピアノに劣らざる純美なる音色を出す事が必ずしもインボシブルでは無いので有ると云ふ事を切に記憶を願ひたいので、之れ音色の研究の一例で有る。(但此場合調律の稍完全なるものと見做す)

ヴァイオリンの初歩を學習する人の事を人呼んで鋸の目立や、キイ、キイ、樂人と嘲稱する、之は誠に御尤千萬の事の有つて、鋸目立先生が能く齒の浮かない程度の樂音を現はす迄に練習するには、少なくとも短くて、一二年の歳月を見込ま

なくてはならぬ。是とて前述の音色の美に就ての深い考の無い輩では、中々二三年でも純正な音樂的美音を出現せしむるを得ざる程に無つかしい樂器の性質なのである。ボーイング(用弓法)の練習の初めに當り、音色に就ての考慮を深くし素と人生に比適すべき樂器そのものゝ特質を考へて、ヴァイオリンを彈くのでなくヴァイオリン其のものに歌はしめるとの心持ちでボアを採つたならば懐つかしい甘味のある、露の有る、人を牽き附ける善美な音色を現はすことが必ずしも出來難い事では有るまいと思ふ。(此場合用糸を吟味し弓、用脂を精選して)

聲樂Ⅱ獨唱歌―唱歌を教授する教師中には稍もすると自己の音程音聲を金科玉條と過信して、人に之を強ふると云ふ惡傾向が有る、イヤな一種の習癖やナマリや拙劣なエキスプレッション又は正確で無い調子に、唯々盲從して之を學

習する學生は實に憐れ憫然の者と云つても差支はない。

昔或る文明國に官立音樂學校が有つた！其所に獨唱歌を教授する聲樂教師が多く居る中に、權威を持つた一人のお婆アサンの昔採つた杵柄を誇るソロの先生が居つたが、成る程以前は獨佛の本場や伊太利で磨いた腕イヤ喉で有らう其音量も中々立派なもので有つたが、今は早寄る年波の聲帯は疲れ音幅は無くなる吸息の量は充分出ず、聲の霑ひと云ふものが全然取り去られて乾燥無味一邊の唯歌ひ廻しをこれ事として居るばかりか、高音部の發音の高い處になると其お婆アサン丁度猿の様な顔をしてイキミうなり出すので、これを聽いて居る茶目連は又猿が啼き出すと云つて笑つて手を撃つて居つた。此の人に師事して獨唱を稽古する年若い花はづかしい、若やぎに富む、青年男女は其身振りの一つ一つ迄をものがすまじと疑似たものだ。それ許りならばまだ好いが、其霑ひの

無い所謂乾燥無味的聲音迄をも似聲るのである。フト或時これを聽いて見識の高いサルお役人は其所の他の先生に向つてアレでは困る、青年男女の歌ふ聲柄と云ふものは、もつと懐し味の有る霑ひの有る、ロマンテイクなしかも餘韻に富める、そして華やかな艶の有る聲柄で若々しく樂々と歌ふ風で有りたいたいと、感想を述べたさうだ。何分學校の經費に極りが有つて、より多額な金を出して年若い生きた範唱をする一流の獨唱家の花形を招聘するには中々レコがかゝるのでと答へたさうだが、こんな例話は随分手近かな學校にも有りさうな話だ！何れにせよ今一步若う人の聲色と云ふものに就て年若い樂生は大に研究す可き價値が有り發聲の際の顔面の和らぎ笑みと云ふものを最も大切な研究事項の一つで有ると考へなくてはならぬと思ふ。

オルガンを學習する學生諸君の必ず深く意を用ひなければならぬ要領は先づ

第一に風袋（ペロース）に空氣を容る可き所謂踏板の練習を主とする事の有つて、空氣吸入の緩急は其の宜しきを要する點に注意し緩なれば音に斷絶を生し急なれば音の粗野を來すのであることを研め、之等の音色に至大の關係を生ずる所を考へ、又増樂器の練習も之と相伴つて甚大の關係有るを知り、踏板―増音器―音栓の事に就て考慮の上即ち音色に就ての注意有る風琴家の現はす樂曲は必ずや他に比して一段の冴えと餘韻と映美とが伴つて、實に心地よき樂音は滾々として湧き出づる音色上より透視して美にして如何にも心地よき樂音を風琴より流れ出させたいものと思ふので有る。

以上四つの例題を以て聊か音色に就て力説したので有つて此中の唯一つの要項を細説するとしても中々數限り無く書かねばならず之はホンの研究餘滴とも云ふ可きもので有る。要之僅にピアノの一つの鍵の中に音色が有り、僅にヴ

アイオリンの一糸一弓に樂音の妙が有り、肉聲美は就中獨特のもので一々其特徴を吟味しつゝ音色に就て滿幅の注意を傾注し、オルガン學習者は風袋と其手指の柔軟圓滑に留意し、各充分なる研究と或るファイリングを感得したならば、今迄になき嘗て未經驗の何ものかを新發見せらるゝ域に到達す可きは明らかなる事であつて、樂界の爲め大に價値あり光輝有る可きは期して疑はぬ所であると述ぶる次第である。

一四、簡易歌曲伴奏作譜法に就て

伴奏 (A. accompanimento) とは本來の意味は同伴物又は連れ弾、脇弾等の意で有つて或る旋律と共に音を和同し協音して進行するの謂ひで有る。

例へば日本音樂に就て之を謂へば、彼の長唄の勸進帳の樂曲で之を見れば其

本手と上調子の連奏又は之に鼓、小太鼓、笛等を入れるとしたならば、一段と其曲趣が雄大になり繊細になり旋律即ち節のみでは比較的淋しかつた楽曲も大層賑やかになる如きもので有る。又義太夫節に於て彼の三十三間堂棟の由來、あるはお染久松野崎村の切りになると、本手と替手又は一八音とも聞く可き上調子が有つて、前段には大そう沈んだ節調も特に華やかになつて来て、聽いて居る人々等が思はず拍子喝采を敢てすると云ふ風に成るので有る、之等は一面から云へば伴奏と云ふ事になると云つて差支ない。

さて現今我國の教科目に必須なる音楽唱歌科の種類の中で小學校に於て用ひ行はる唱歌には最も平易なる歌曲が多い、之を管に其の旋律のみ彈奏して兒童に教授する場合としたならば、餘りに淡泊に失し何となく物足らぬ心地がせらるゝので有る之に適當なる和聲的調和を加ふると其曲節が誠に晴々とした心地

を生じ重みと深さが増し面白さが浮いて出で来て、茲に愉快なる感情が一層燃えて音楽美を嘆美する情操が理論的にも彌々増加する次第である。そこで伴奏を作るといふに就ては大切な事項が澤山有るので有るが大體に區別すると次の四項を必要とする。

- 一、音程上の知識の必要
- 二、和聲學の心得
- 三、調和と云ふ事の工風と鹽梅
- 四、美的精神上的の多寡の量
- 五、耳覺の良否鋭敏

今伴奏を作るに就て試みに一の繪畫を書いたとする其は家屋の繪であるとする、此の家は日本の家屋を書いたものとする、其家屋ばかりでは聊物足りない

之の背景と傍景とを必要だ之の背景及側景即ち周囲の景色が伴奏で有つて伴奏に依つては其旋律を生かし又は殺しする場合が生ずる、言ひ換ふれば背景等によつては其繪畫が引立ち或は抹殺されると比しきもので、歌曲の伴奏を作り試みらるゝ方は大に此點に於て慎重の心掛が有らねばならぬ。

今次に音程上の簡単な解釋を試みやう。

音程、旋律の中には或る音から或る音に進行するに就て此の二つの中に、二音間の距離を生ずる之を音程と名づくる。(同時に響く二音間にも音程あり)

例へばハ調のDoよりre音に至るものは之を二度と云ひ、Doよりmi音に至るものは之を三度と稱へる。茲に一つ申述ぶる事は近來では人々が口にする音名は大抵獨逸などの呼び方が行はるゝからこゝには其を使用して書く事にする、それはハはC^{ツェー}、ニはD^{ダイ}、ホはE^{エー}の如く呼ぶ。

(音名) C^{ツェー} H^{ハイ} A^ア G^{ゲー} F^{フェー} E^{エー} D^{ダイ} C^{ツェー}

之の呼法を覚えて見れば僅々七つの音名であるから記憶し易い。

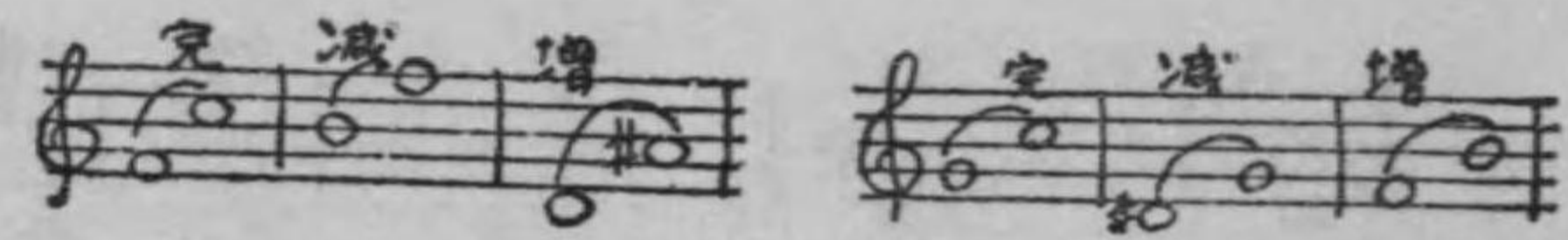
然して音名を呼ぶに此の呼法に依りC^{ツェー}からF^{フェー}或はG^{ゲー}よりH^{ハイ}までと云ふ如くするときは呼び馴れて簡明に記憶が出来るのである、次に記す音程は之を暗記する程度に有りたい。



初音

完全初音は一度で一つの階をも有せず同音で有る。

増初音は一度で半階を有す。

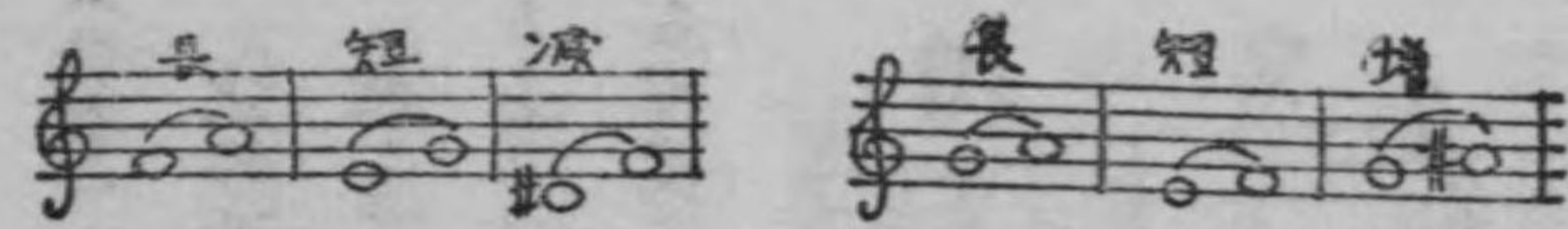


第五音

完全五音は五度で、三階半を有す
 減五音は五度で、三階を有す
 増五音は五度で、四階を有す

第四音

完全四音は四度で、二階半を有す
 減四音は四度で、二階を有す
 増四音は四度で、三階を有す

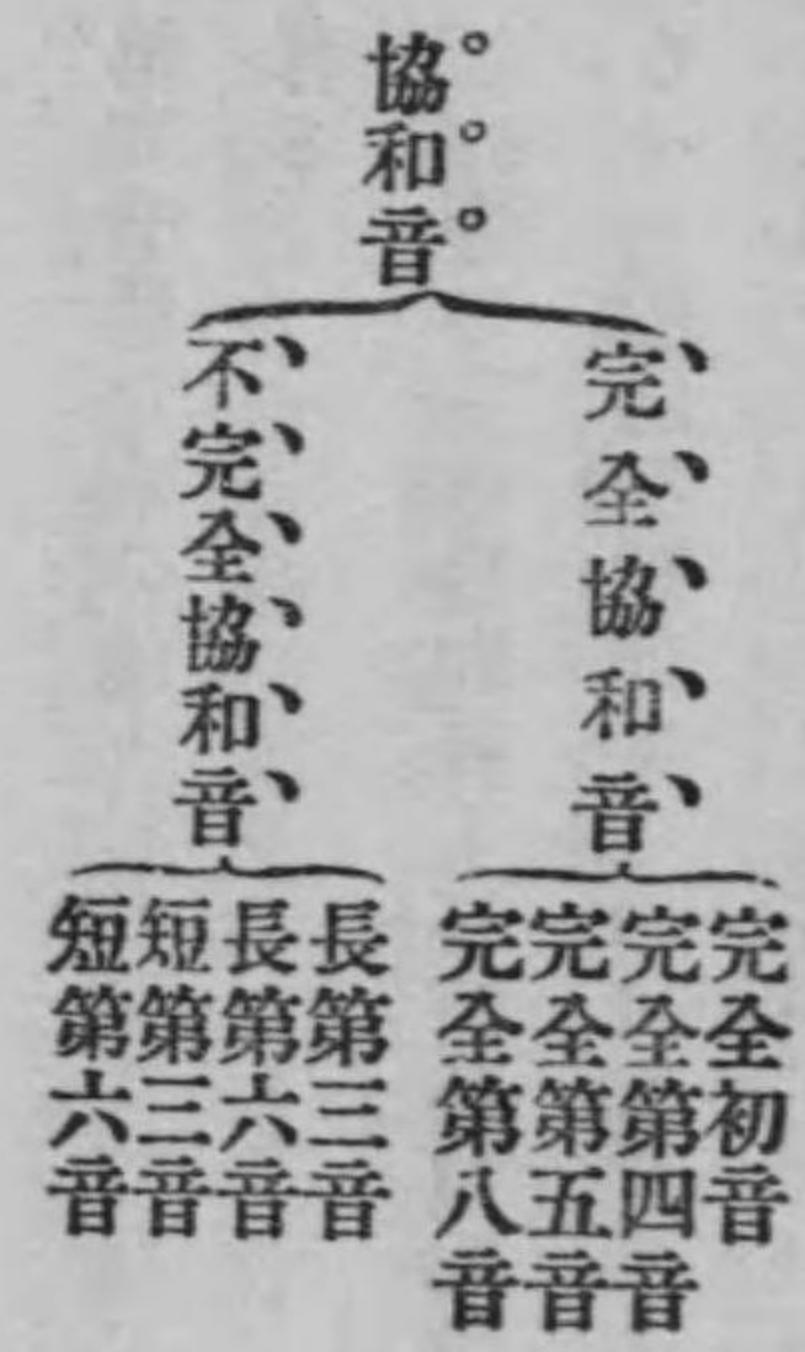


第二音

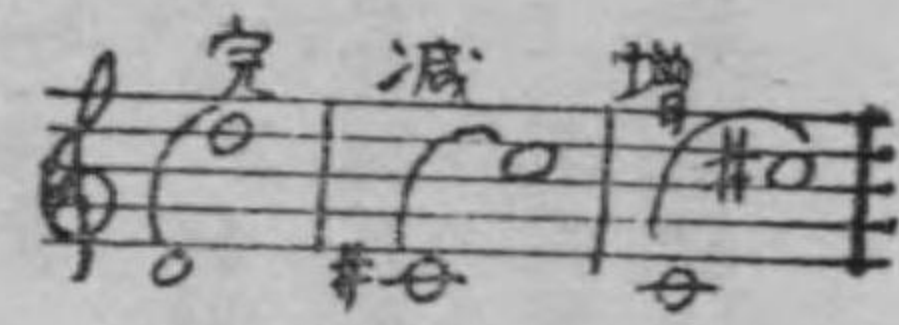
長二音は二度で、一階を有す
 短二音は二度で、半階を有す
 増二音は二度で、一階半を有す

第三音

長三音は三度で、二階を有す
 短三音は三度で、一階半を有す
 減三音は三度で、一階を有す

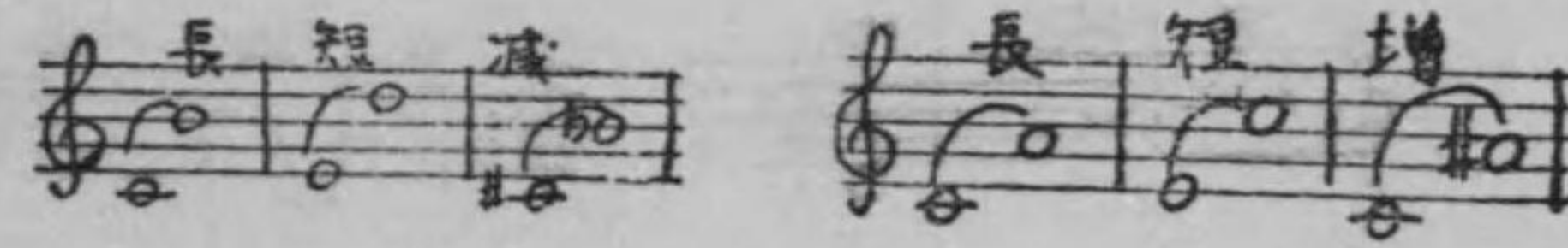


音程は之を分けて協和音程と不協和音程の二種に區別する、又協和音程を細別すれば左の如くなる。



第八音

完全八音は八度で六階を有す
減八音は八度で五階半を有す
増八音は八度で六階半を有す



第六音

長六音は六度で四階半を有す
短六音は六度で四階を有す
増六音は六度で五階を有す

第七音

長七音は七度で五階半を有す
短七音は七度で五階を有す
減七音は七度で四階半を有す

協和音程を右の通りに細別して後に残る音程は總て不協和音程と名づくるので有る。

これ等の完全協和音と不完全協和音の各種をピアノにて彈奏し正確な耳感を得るべく屢之を試彈するのは和聲學上重大な仕事で出來得れば耳覺にて今のは完全第四音である、之は長第三音、之は長第六音であると之を試彈し正鵠な解答の耳を持つ可く心掛が肝要である。

三和音とは如何なるものか、それは根音と外に、二個の音程とを合せて名附くる、根音は三和音を作る基本の音である。其の根音より上に數へて第三度を三音第五度を五音と合せれば三和音が成立される。三和音を容易に成立させるには其性質に頓着せず先づ音名を左から右に列記する、そして其音名の何でもを根音として其れから第三の音を三音、五つ目の音を五音とすれば立所に三和

音が出来る。

CからなればEとGとで三和音が出來て、
EからなればGとHとで三和音が出來る、
GからなればHとDとで三和音が出來る、
CDEFGAHCD

但Cから數へて八つ目のC音は第八音である故に根音と同一で有る。以上の如く繰つて作つて行けば何處迄も三和音が出來るのであるが其性質は三和音によつて皆夫々異なつた性質に爲る。

- 一、短第三音及不完全（減）第五音は減三和音で、
- 二、短第三音及完全第五音は短三和音とする、
- 三、長第三音及完全第五音は長三和音とする、

四、長第三音及増第五音は増三和音とする、

四和音（四聲和聲）

前に述べた三和音に更に又一つの音を加へる然る時は四つの和音になる、之れを四聲和聲或は四和音と稱へるそれは次の様な順序になるのである。

イ、三和音の根音を高音に於て重ねる即ち其根音の八音を結合すると第一の位置とす。

ロ、三和音の根音の第三音を高音に於て重ねる之を呼んで第二の位置とす。

ハ、三和音の根音の第五音を高音に於て重ねる之を呼んで第三の位置とす。

右の次第であるから和絃の位置は其最高聲にあたる音程に屬することゝなる。

進行の事 進行と云ふは和聲に伴つて旋律が進行する状態の謂ひで有つて其

形式は左の三種がある。

一、並行進行

並行進行とは同度でも異度でも其の進行が同時に上行したり下行したりする二聲音の間に生ずる和聲的關係で其形態が並行の様に進むから其の名が起つたのである。

二、反行進行

旋律と其和聲が進むときでも退くときでも常に反對になる状態を指して反行進行と名づけ其二聲音の間に生ずる和聲的關係から名が起つたのである。

三、斜行進行

旋律と和聲が一つは同じに依然止まつて他の聲音は昇つたり降つたりする状態をいつて其二聲音の間に生じた進行の工合から其名を附けたのである。

分散和聲と密接和聲

分散和聲とは諸聲音を開いて分離する様に作るものであつて高音を八音低く移す時は此の高音は中音と次中音との間に來たり、又次中音を更に八音高い所に移す時は此の次中音は中音と高音の間に來る様なのがそれで有る。

高音の下に他の三音が最も近寄つて連接した場合は之を密接和聲と名づくる。

和絃連合の方則

イ、問題の第一の低音の上に(8)の字を存するか又は何も附いて無い時は此低音に基き構成する和絃は高音に其根音の第八音を要し又(3)の字有る時は高音に其三音を要し(5)の字あるときは其五音を要するのである。此の方則は各問題の第一の和絃にのみ用ふることにす。

ロ、次に續く和絃に同音がある時は此音は兩和絃に於て同一の聲音で歌ふ様にし之を連鎖すること、これは連鎖音であるからピアノ等で試弾する場合には此音を再度弾くのがよい。

ハ、次に續く和絃中に同音無く其根音が低音にあるときは上部の三聲音は低音と反行して次の和絃中で最も近き位置に進むこと。

ニ、平行進行反行進行を問はず同聲音の第五音第八音又は同音の連続するを避けること。

但同じ第五音又は第八音は繰り返すを得る。

ホ、増初音の外は一聲音でも増音程を進行せぬことは心すべきで有る。

和絃の轉回

和絃は其根音で無い音を低音に存することが有る之を轉回和絃と云ふ。三和

音の第三音低音に在る時は此の和絃は第一轉回即ち六⁽⁶⁾の和絃と云ふ。

三和音の第五音低音に在る時は此の和絃は第二轉回即ち六四⁽⁶⁴⁾の和絃と云ふ。

第六の和絃方則

第三音は決して之を重複しては不可で有る。

旋律上非常に好旋律となる場合は宜しい。導音は反覆進行又は轉調モジュレーションの外は成る可く之を重複してはならぬ。

平行進行反行進行何れでも宜き時は通例反行の方が宜しい。

同聲でも異聲でも同音の二回連続するは避けなければならぬ。

6の字に加へた斜線は其本來の意味を替へるものでは無い、唯其低音が三和音の第三音に當り又低音の第六音を半音階的に半音上ぐべきを示したので有る。

第七の和絃

完全な第七の和絃は根音、第三音、第五音、と第七音を含んで居る。

第七音は不協和音程で有るから之に續くに協和音程を以てしなければならぬ之れを名づけて第七の和絃の解決といふ。

第七の和絃の方則

音階の第七音を導音リードノートと呼び第七音なる語は和絃の第七音にのみ使用すること。

第七の和絃にては屢々第五音を廢し根音を重複すること。

完全第五音の次に不完全(減)第五音の續く時は第五音の連續することを許すが、不完全の次に完全の來るときは之を許さない。

但不完全第五音の連続するは之を正しとす。聲音の下に跳越^{スキップ}して外の和絃の第七音に至るを許さない。但一度下行は宜し、時に上に跳越して第五度の第七音に行くことを得。

根音及第七音に至る平行進行は善きこと甚稀である。

一つの聲の進行する形が第五度、導音、第五度と爲る順序に連続することは避けるが宜い、そして此導音小節の弱聲部に當るときは殊に然りである。7の字の下にある井^リ又は井^リは低音の上第三音にのみ係はるもので有る。

第七度導音の第七の和絃此の和絃は度々他の第七の和絃の解決の後に次接することがあるが左の導音の七の和絃の規則に依て之を進行させるが宜しい。

根音は一度上りて主和絃に至ること。

第三音は若し七音の下に有る時此三音は一度上る又そうでなければ一度下るこ

と。

第五音は一度下り或は一度上ることあり。(通例は一度下るを常とす)

第七音は一度下ること。

之等の諸方則に基いて先づ低音に對して其和聲の附し方を練熟して耳に於て又は目に於て其不可なるものを直に了り之に依つて又附け直して屢々練習することが肝要で有る。

次に靜止法に就き略解を爲す。

靜止法^{ケイデンス}は和聲的進行の終結(一時)する方法である。之れには六種の形式が有る。

一、完全正格靜止法は十分靜止法とも云ふ通例七音を有する屬和絃より主和絃の三和音に進んで止まるもので有る。

二、不完全正格靜止法は和聲の進行に於ては完全正格的の様に進行するがその何れかの和絃に於て轉回せるものを有するか又は主和絃に於て終らない高音を有す。

三、完全變格靜止法は次屬和絃より主和絃の三和音に進んで止まつたもので何れも根本の位置からで且主和絃に終る高音を有する。

四、不完全變格靜止法は進行では完全變格的の如けれど何れかの和絃が轉回をなし、又は主和絃で終らない高音を持つ。

五、半成靜止法は何れの和絃からでも進んで屬和絃の三和音で止まる。

六、偽成靜止法は通例其第七音を有つ屬和絃から進んで主和絃を外にし他の和絃で止まるもの。

樂曲伴奏法に就ては主要なるものは實に

對位法Ⅱ對聲學が有るこれを解さなければ伴奏は作成することが出来ないもので有るが、この書はそれらの解説をする目的でなく弘く和聲學を説くのではないから本論を飛んで簡略に歩を進めること、し旋律調和の理論から實際に移つて行かうと思ふ。

○旋律的調和法

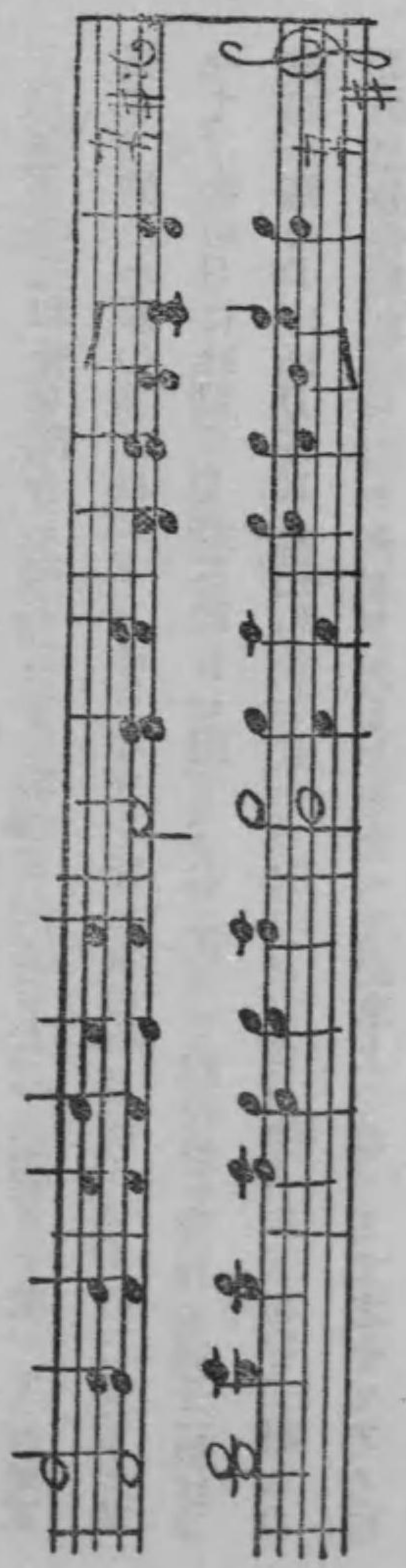
一、低き高音に和聲を附するには密接和聲が宜しい。

二、高い高音に和聲を附するには疎らな分散和聲を用ふるが宜しい。

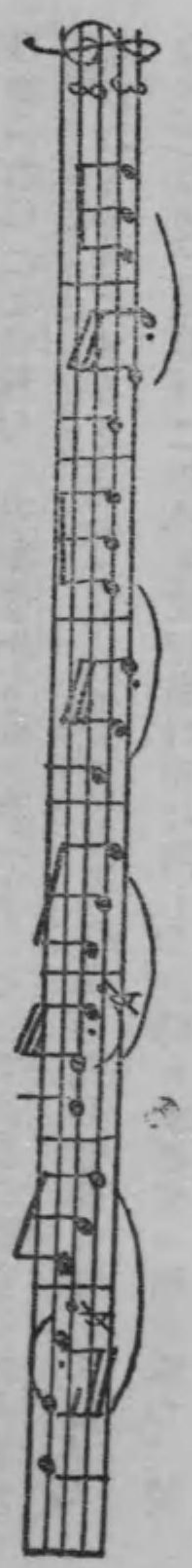
三、高低に偏しない高音を以てする時は其聲音の結合上から見て最も完美に響く和聲を擇ばなければ成らぬ。

四、各四部の聲音が皆一所に跳越する様なものは成る可く之を避けなければならぬ、一つの和聲から他の和聲に移る時最注意を要す。

(例一圖)



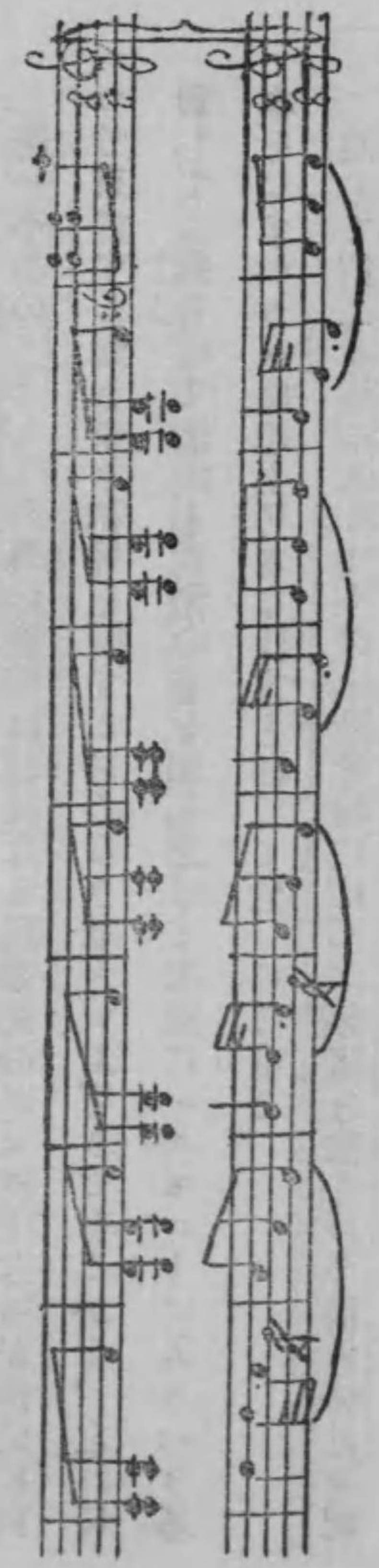
次にメロデーに向つて半伴奏的に分散和聲を用ふる一例を擧げやう。



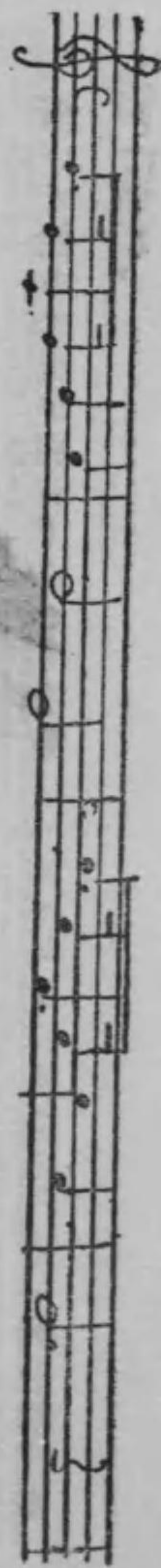
始めのEにはCEG。GFDにはGHF。を配し。DDDにはGHF。FE

(例二圖)

CにはGCE。EDCにもGCE。DCHH。にはGDF。DCAにはGHF。
HAGGにはGCE。と云ふ工合に簡単に配合したる方法で有る。



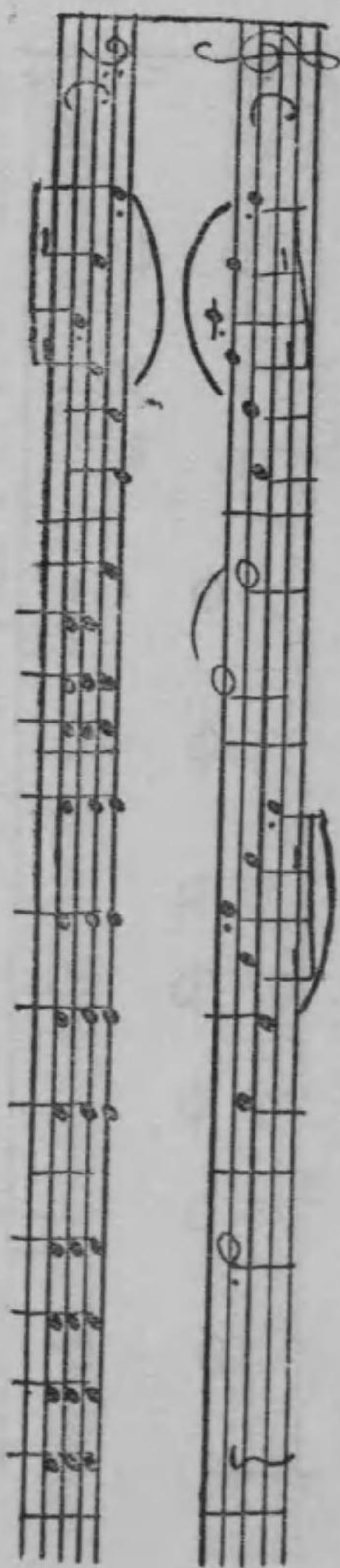
續いて始めの出が同音^{ユニゾン}であつて次第にハルモニーに入つて行く一例を擧げる
ことにする。



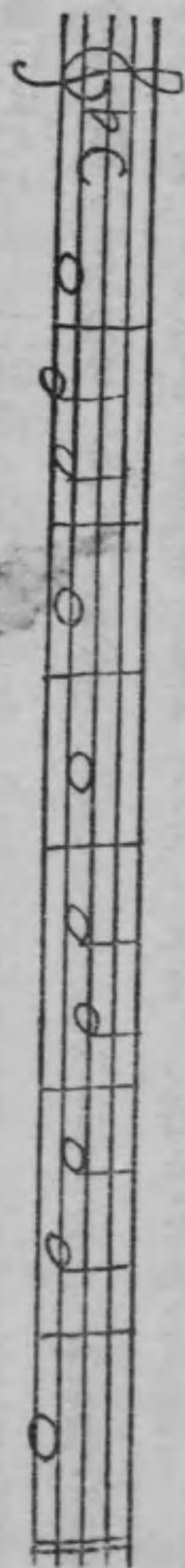
第一小節の E C E G A の旋律は輕快なる跳躍的のメロデーなるが故之に向つて束縛する如き重き和聲を附するは心なき業といふ可きで有るから、之れに對しては同音にて然かも同型の音を配し之にて次第にハルモニ^{ニッ}ーに入るべき基本をなす如きは曲想上巧者な仕方と謂つて宜いので有る。

然して第二小節に入りてGの二分音符にはC Eを省き態とGの同音のみを配し。次にC Eを充當したのは實に上手と謂ふ可きで。EにはC E Gの三和音。第三小節に入りてC Aの進行にC F Aを配し。F Aにも同様で。C F Aを以てCに對し。Aにも同様で。Gの符點二分音符にはC E Gこれは月並みの仕方である。

(例三圖)



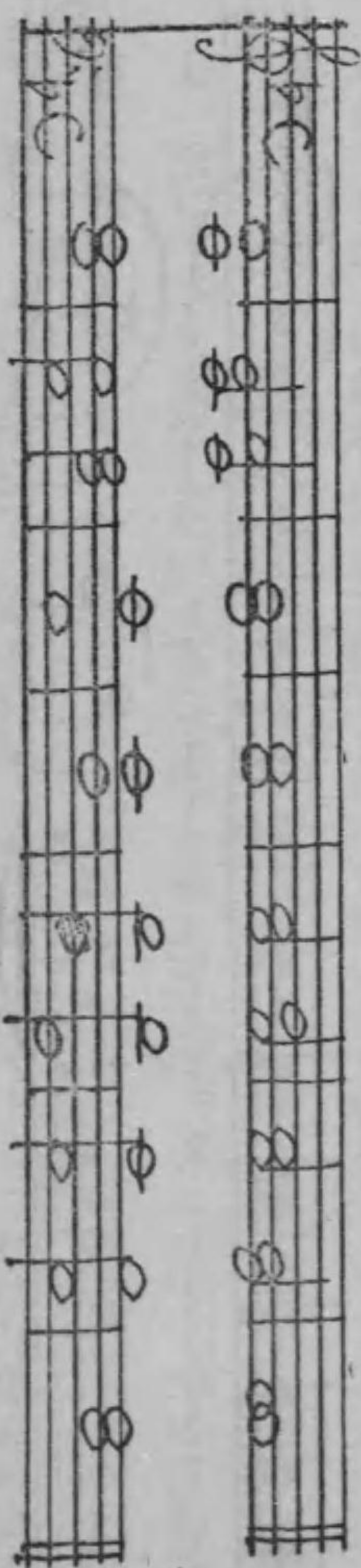
次には全音符及二分音符のみの例を擧げやう。



此の例題に於てFの全音符に對してF A Cを配合し根音が八音即ち高音に出

で。次の小節のEにはC G Cを配當し、次のFには始めの如くF A C。第三小節にはC C Eの三和音。四小節のAの全音符にはF A C。次のAの二分音符は心持を變へてD D Fと充て。次のBにはB D F。AにはC C F。次のGにはC B EとしF音の終尾には根音を重複してAを配合して終ることとする。

(例四圖)

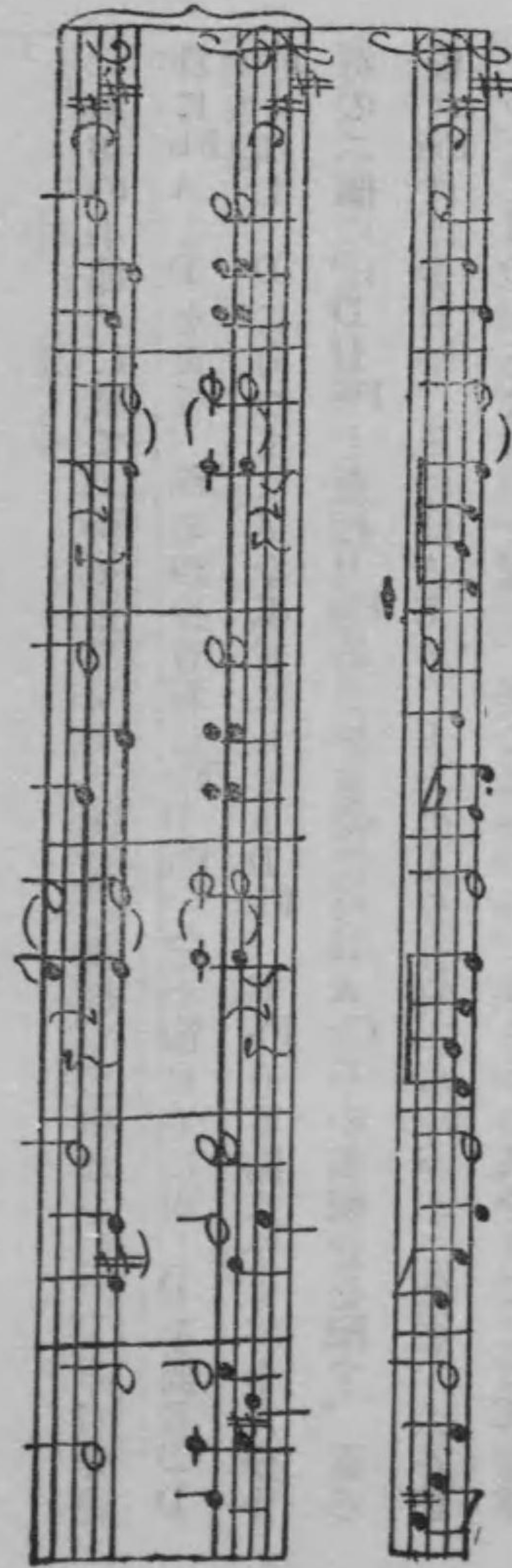


その次はメロデーを放れたる純伴奏式の例を擧げて説く所あらうと思ふ。



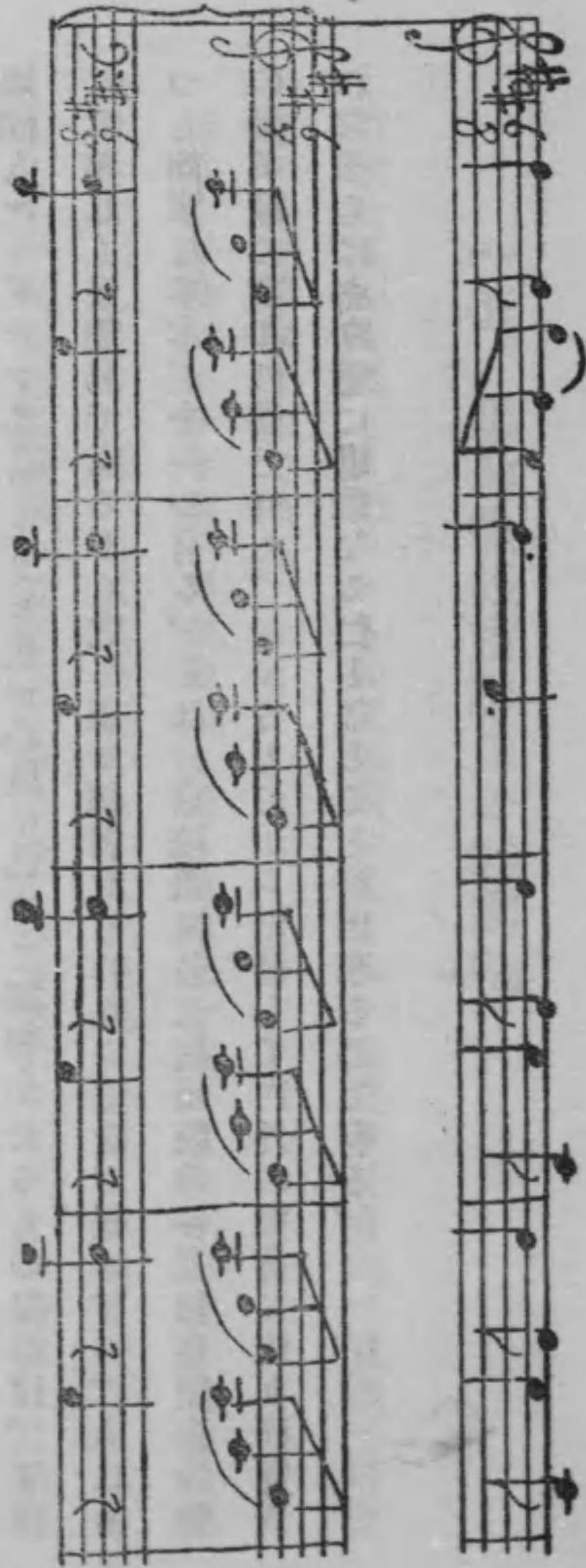
最初の小節Aに就てD Fisを充て、Dを低音に重ねて三和音とし。Dの四分音符にFis AとDを充て。Fisの四分音符にFis D Fis。三小節目Aに對しDを低音D D Fisとなし。Dに向つてはAを低音にしてA D Fis。G Fisの符點八分音符十六分音符の二個にはD D Fisと重ね、Fisの二分音符にはA A Cis Gの四個音を配す。五小節目FisにはD D Fis。GにはA E Cis。E Cisの八分音符にはAis Gの二和音。六小節目DにはH D Fis及次にHを配し。EにはFis Cis Ais。CisとAisの八分音符にはEを重複して用ふ。出來上り次の如し。

(例五圖)



次の例は分散和聲式の最簡單なる一例である。

(例六圖)



歌曲伴奏を附せんとする人々は、先づ一つの旋律即ちメロデーに對して怖れず驚かずピアノに於てグングン試弾して其各音をノートブックに直ちに樂譜に依り、記載し後種々に構成の方法を替へ自己の氣に入る迄伴奏を作つて見ることが第一の發程で有つて、これが後來巧みに伴奏を作るを得るに至る要領であ

る。

その次ぎは可視的に之を検査し若し誤謬あらば和聲の方則を引用して一々字引を當て、正す様にして行けばよい。而して簡易なる伴奏樂譜の手本とも云ふ可きは文部省音楽取調掛の編になる小學唱歌集の伴奏樂譜(東京音楽學校藏版) 埃國人ルードルフ・ヂットリヒ氏が心血を込めて調和したるものなれば、正確にて美しく且簡易で有るから之に依り練習せられんことをお勧めする、次にもつと簡単な手本が今一つ有る、それは京橋銀座教文館出版の各基督教組合教會の讚美歌の調和の書で有る、かゝるものから出發して内外の樂書に依り研究されたならば必斯道に堪能なる仁となることが出来るので有る。

一五、唱歌教授實驗上の時間割

唱歌教授の時間とは統一ある音楽唱歌を課すべき豫案を教育的に實施す可き一定の時間を指すので有る。

尋常小學校第一學年第一學期の如き漸く母の乳を放れた許りの幼年兒童の集合せる學級に向つては、毎日其教科の過半は唱歌或は遊戯に充當す可きは至當なることで又教育實驗家の首肯する所である可きを信する。この時期には殆毎日唱歌及遊戯が其教科本體で有ると心得て、此の科目の媒介を得て漸次に他教科に入らしむ可き素地をつくるのであるから、之れ等の兒童の學級には必樂器を備へ附けて置いて度々教授の終止或は教授の中途に於て音楽唱歌を課す可く無理に所定の時間割を強ふる如き形式的の愚を爲さざる可きは賢き教授者の探

る所の最良の手段と謂つて差支ない。

音楽唱歌の如き技能學科に於ては其科の特質とも云ふ可きは之を細かに何度にも別てゝも度々練習の期を與へると云ふ方針が、熟練なる教師の仕方であつて理論にも實際にも効果が多く、一週僅に一時間の一回で其の時間が休日になつたり或は校外教授が其の次ぎ有つたりする事が往々有る可きで然かすると甚だしきは一ヶ月も唱歌の時間が無い様な珍妙な現象が有る。

是れ等の事が有つてはならぬから一時間を折半して約三十分宛となし、之を一週二回に組合せる時は此の教科の本旨にも適した事であつて其科の成績の跡顯然たるので有る。

三十分制を採り是れを他教科と組合せるには修身、國語、遊戲、(算術の中)珠算、等に組合せるのが宜しく、體操科とよく組合せてある學校等あれど之は

甚だ錯誤の次第で、身體を勞したり又舉動號令を稱ふる爲め聲音を使用する科目の後を承くる等は決して策の得たるものではない、これは氷火同比の事柄と笑ふ可きものである。進んで高等小學校の如きに及び稍程度が進んで比較的複雑なる歌曲を教授し若しくは樂譜を寫譜させる等の域に至らば、或は三十分制で秩序ある教授を成し得ない事もあらうと思ふ、之れ等は一時間制を採るも大差なからんと思ふのである。

次に幼學年と音楽教師との關係に就て一言したいと思ふので有るが、抑も音楽唱歌科の若芽は何れか？之は幼稚園小學校であらねばならぬ。この小學校の尋常科一學年の最初之を音楽に導き入るゝ基礎教育が甚だ大切至極の事で、これに依つて確たる耳を作り、簡易乍らも旋律を知り、靡げながらも樂趣を注ぎ込まれるので有る。この大切至極な二葉の若芽を撫育すに多くの學校では専門

の音楽家が専科教員として有り乍ら其多くは尋常科一學年より受持たない事で三學年級邊から受持つて居り一學年及二學年級は學科受持の訓導が教授をして居る實際が澤山有る。之の事實は其の根柢に於ける樂的效果を及すことの出来ない誤謬の仕方であると思はれてならない、此の改善に於ける點は切に當事者の一考を煩はしたいと思つて已まぬ。

初學年に於ける兒童教育の樂的效果は非常に有効なるもので所謂『三子ツの魂百まで』なので、今日音樂的に調査をして見ると現代の名ある音樂藝術家は皆子供の折即ち二葉の若芽の時代に相當な教師に就て樂的趣味の啓發を享けたる語を換ふれば洗禮を受けたる人々で有ることは其の事實が證明する所なので有つて、幼童稚女より良師に就かずして其スタートをなしたる音樂家は一人も無いので有る。よし音樂を専門に研究し或は身を音樂藝術に委ぬると云ふ人許

りでなく、一般の人士も比較的完全の耳を作り音樂に好き理解を持ち或は自ら音樂を味ふことが出来たならば、如何程趣味性に富む本當のレデー・ジエントルメンが出来得ることかと頼もしく考へるので有る。

近代思潮は漸時に悪傾向に流れて行く様だ！自由とか解放とか性慾とか、本能とか、遂には飛んでもない事に成つて行きはしまいか？之れ等の時勢が社會に及ぼす缺陷等を救済するに就ても、今少し音樂科の様な救済的に適確な學科は大に普及改善して進み邦家の爲め良風俗習慣を形成維持して行かなければならぬ。

一六、唱歌教授上の秘訣一則

唱歌教授の實際上に於て其秘訣とも云ふ可きものに就て茲に其數項を擧げて

見るならば、第一には其教授に當つて頗る熱心と愛とに満つることを要するの
で有る。

熱と愛とに缺けたる所謂力なき魂で仕事に當ると云ふ事は何業に依らず其事
業が成果の域に至らぬ道理で有つて、殊に愛に満たざる教師即ち児童生徒に對
して衷心より愛撫の誠意なくお役目的で教授を爲しつゝある教師の教授が其効
果の擧らぬのは尤も至極の事で有るといつて差支ないので有る。

『ミューズよ！今日の此時間に於て此の可憐なる児童生徒に對して此の名曲
を授けよりよく徹底したる教授をなさしめ給へと』、時間の最初に默祈する位
の教師の敬虔なる態度で有つてこそ其所に生命があり力が有り熱が有るので有
る。

勤勉にあつても一時間は一時間、怠まけても一時間は一時間！で有る。此の

考へは日常教授上のよき教訓と主義で有ることを大方の教職に在る人々に申上
げたいところ有る。

第二には嚴格なる管理と柔らかな味有る教法、児童の管理は嚴格に有らねばな
らぬ、苟くも人に知識技能を授けんとする以上しかも多人數一組で喧噪錯雜の
裡に有つて能く意識に入る可き教授を爲さしむることは絶対に不可能で有る、
履き違へた一部の論者は自由教育だ藝術教育だなど、児童勝手な甲は右に、乙
は左に、丙は横に、等の一種の解放教育をやつて教師も一人で自分勝手な没交
渉の教授をやつて居る向が有る、之れ等は新しがつて古きに劣る事で、極端に
言へば、出鱈目教育の一種であるので有る。

親しむ可く懐しき有る温顔と柔らかな味、有る言語態度で諄々と教へて行く工
合は、傍目から見て居ても實に心地好いもので有る、まして児童生徒に響く影

響は如何で有らう、其技能を確と練る許りでなく一種の感銘の度合も加はつて教授の効果が著しい。

唱歌教授は兒童生徒の鼻汁をよくかませる事から這入る可きで有つて、鼻口の呼吸より出發する歌聲は其鼻腔の共鳴を伴ふて美聲たる譯で有るから、鼻汁が有つては好き聲音を出し得ぬので有る、まして頭腦との關係もあり種々の點に於て必ず鼻汁を取らする事は必要である、(兒童は先頃取つたかと思ふと青いのが又ゾト出る)之れは必ず實行をして戴きたいと思ふ。

第三には兒童生徒を働らかせて教師の口數を少なくする方法。

よく有る教授で見るところで有るが教師は自己一人で口八丁手八丁で大童わになつて教授をする、兒童は少しも働かず他の事の様を受け身のみで進行する、これでは駄目で有る。

教授は教師の獨演會では無いのであるから可成口數を餘計にせず子供或は生徒を活躍させることが肝要で有る。

第四には熟練巧妙なる兒童生徒をして助手の如く補導役を勤めさせる事。

唱歌教授の如きに於ては往々熟練巧妙の兒童生徒が出來上るものである、素質、頭腦の好き等之を巧みに配列して後れたるものを進歩の域に誘ふ爲めに或は列中に有つて獨唱を爲さしめ、或は教壇に排べて唱歌せしめ之に一同を唱和せしめたりする時は、其れが爲めに一同の成績を引き擧ぐるに甚だ有効なる場合が多いので有る。或時はハーモニカを上手に吹奏する兒童に教材を覚え込ませ、學校へ持參せしめて(他の教室或は運動場にての吹奏を嚴禁す)之を一同の前に起立せしめて吹奏させる等機に臨みての補導役にし全組の成績を上進する爲に手傳はする事などが宜しいと思ふ。

第五には教室の審美的裝置から進んで兒童の精神を音樂に牽き附くる方法。

教室内の清潔整頓と美的裝置は斯科の教育的目標に達するか否かの最初の岐路で有つて、之有らざれば如何に熟練巧妙の教師の教法も半分は徒勞に終らねばならぬ。窓の開閉の些細な一端までをも注意して一定し、出來得れば平靜なる色（綠若くは薄き藍色）の窓かけ等にて先づ感じの好きものを選び、黒板は五線を引きたるものは（うす綠、黄色の類）明瞭なるものにて、其他小黑板黒板拭、教鞭、洋琴、風琴、掛圖、拍節機、等のものに就て一々其の裝置を便宜に且整頓的に心掛け、其他偏額、鏡面、皆其場所を選びて、折々の花など盛花式に飾る如くするときは、一面から見れば贅澤の如くあれど此の美的學科の本旨で有るから必ず此の裝置を探り、兒童等は子供心にも此の教室内の一種のフイーリングを非常に心好く感得し、従つて唱歌教室への入場を待たる、様に

形式美より漸次進んで内容美に入らなければならぬ。

次ぎは教師と兒童生徒の目と心とが絶えず、音樂と云ふものを中心として連鎖結合して居らねばならぬので、所謂「氣合の中」に一致團結して居る状態（圖）で有らねばならぬ。

ピアノの彈音の一つにも耳を傾け、風琴の一奏にも目を張る如き様子で有らねばならぬと同時に、今や寫眞師が將にレンズの蓋を探らんとしつゝある、刹那の氣分が兩者に通ふて居らねばならぬ所で、之れは教授者の熟練と教才と工風とが相俟つて如斯き有様を現出するで有る、以上の如く有らねば如何に名曲でも如何に熟練の範唱でも如何に巧妙の伴奏でも其効果の十分を發揮させる事が出來ぬので有る。

一七、將來の學校音樂に對する冀望

將來の學校音樂に對する希望に就て書かんとするならば實に各種の問題が山の如く堆積して居つて、何れから手を下して宜しいかに困る程で有るか其中に有つて重き緊要なる問題に觸れたいと思ふので有る。

第一に將來の學校音樂は教育學上新思潮の根據に依り科學的論理的基本に據らなければ成らぬ事である、凡そ如何なる教育上の問題に於ても合理的即ち科學的論理的に其根據を占めなければ學術上の定説として學界一般に承認せられぬ處で有つて、貴重なる可き經驗の礎の上に立ち科學的論理的の柱の設立に向つて努力すべき事は明瞭なる所であつて、經驗のみを主とする。

教育學上の原理に基を置かない今迄の様な自己本位、氣分本位、剝削主義の

唱歌教授から脱進して、主觀的經驗を客とし、學理的根據に依る事を主體として進んで行かねばならぬ。現代に於ては主觀的より客觀的に經驗的より科學的に進展して行く可き趨勢で有つて尊き經驗はさる事乍ら何時迄も自己の作曲や自己の誇張に依る唱歌教授の時代でなく、何年を経ても同じ程度の効果のみを得るに腫の足跡を印す可き現代では無いので有る。

學校音樂家は何うも理論に疎くして實驗を主とする傾向が有つて、其所説は今迄の様にあつたならば今後は何人にも顧みられずしてあはれ永久に葬らる可き運命を持つて居る、此の傾向から突き進んで學理的根據に向つて理論を闘はずと云ふ時代に赴かねばならぬと思ふので有る。確立した統計の基に教授材料を分類し例へばクラシカルのもものが幾つ、民謡的のもものが幾つ、我國の新進作家の手になつたものが幾つ、童謡的のもものが幾つ、これを一ヶ年の教材に資

料として用ひ之が教育學的統計的批判の結論を得て、順次に改廢を行ひ日進の大勢に副ふ可き有効なる價值的な教法を實行して行かなければならぬと思ふ。

次ぎには議論家が無いことで勿論『雄辯は銀で沈黙は金で』ある如く時に沈黙も結構で有るが理屈で音楽を追ひ出すなど、イヤに聖人振つて言ふ事も言はずさりとして筆執ることもせずの有様で有る、時代は進んで已まない大に論じ大に書き大に實行しなくては成らぬ。

今中學校の音楽(唱歌)の時間が減せられた！我國音楽家の輿論は別に之に對して大なる響をも擧げ得ぬ。歐米の中學校の音楽教師には女が多い、これは日本の現状から考へると何となく可笑しい様だが此の女教師の學識、趣味、品格共に高雅であつて、よく幾多の悍馬の如き腕白輩を苦もなく、御して行く、生徒は衷心より敬意を以て柔順に其の指揮命令を遵奉するので有つて、今假り

に此の女教官連に對して中學校の唱歌時間を減せよと命令でもするとする！、彼等は如何に之に對して議論沸騰するか？如何に輿論が激調を帯びて來るか？を想像する時に、高等女學校最終學年の音楽科の時間を削減した日本の現況を報導でもしたならば、彼等は驚愕して何たる非文明的教育施設で有るよ!!と嘲笑することであらうと殘憾に耐へぬのでは有るまいか？

第三には抑も我日本帝國唯一の官立東京音楽學校に對しても將來の學校音楽の方面から随分多くの希望が有るのであつて予をして無遠慮に其の胸中を吐かしむれば、最有力なる校長を戴きたいことで今一息、教育音楽(其校使命!)の爲に力瘤を入れて貰いたいものと思ふ更に渾固一番して今少しく時代精神に生きて貰いたいものと思ふ。以前からも其傾向が有つたのであるが近代に於て益靡動して行くのは甲乙師範科生の教育で在る。これは本科學生教養の幾分餘

滴を被らしむると云つた様な取扱ひ？で有つて、何人が言つたか知らぬが『粗製濫造』だと今年あたり叫んで居つた。同校長は音楽教育の本旨に徹底して居ない様な心持ちがして成らない。即ち國の音楽教育の基礎根本である可き音楽教師の養成に向つてなどと、今更らしく嘸々する迄もない事で分り切つた事實で有つて、一人の善良なる教育的教師は百の人材を造る可き力を持つて居るので有る。

晩近世界を風靡しつゝ有る大思潮はと敢て大きく云ふ迄も無く勞働問題、普通選舉、婦人問題と云ふが如き改善問題の多くは、民本主義を欲求する等の思潮ある中に何時迄も本當の意義に目醒めぬ學校の施設經營は困つたもので有ると思はれる。現校長の村上氏とは餘り面識の多くを持たぬので其全人格を知らぬが一見した處で温雅恭儉にして立派な紳士で最近に文學博士にも爲られた位

で有るからそんな譯の分らぬ人ではないらしい？と思つて居る、乍去音楽學校の校長として之の藝術中最も感應的な昂奮的な教育的な特技的な音楽學校の校長としては同校の各科卒業生も已に今日に於ては數多夥しく人材が輩出して居る現在で、中には随分教育的行政手腕も其知能も經驗も具備したる人々が尠なく無いので、是等の中を抜擢して弘く海外の純藝術的教育と教育的音楽の充分なる視察を遂げしめ、歸來之を重用して校長たらしめなば何等音楽に就て學びし事なき音楽的聳者で無くとも別に差支は無く、却つて本體の意義と其使命を知悉して居るので、職員の適不適も分明となり學校の内外に良好なる施設と國家音楽の振興てふ本旨に於て音楽教育の改造改善も望まれる譯であるから、此際何うしても音楽學校長には音楽者出を要求す可き聲が高くなるのは無理も無いのである。

第四には我國教育音樂家の待遇問題で有る音樂を神聖なる天職とし毫も物質上の利慾を見ず、常に高遠なるミューズの神に敬事して現代の世俗に超然たる者は學校音樂家で有らねばならぬと言ふ事は日常音樂家の理想で有る。偉大なる藝術に身を委ね常に理想美の世界に憧れ、名譽ある技術上の榮冠を得んとし其の玉座に連ならんとしつ、技巧に満腔の誠意を捧ぐるものは音樂教師で有る。之を教育に適用し我國の文化的中樞家庭の現出に勉むる此の大教育家にして『人の子を音樂に導けどサテ我が子に與ふるピアノ無し』の嘆聲を洩らすは誠にお氣の毒と云はうか悲しいと云はうか其慰む可き言辭を見附け出せないもので有る。

今日の學校音樂家の待遇は實に相互に同情に堪へずの一點張りで行かなければならぬものであらうか？餘儀なくフロツコートを身に纏ひあるはモーニング

に身を装ひ美鬚を捻つてピアノに對し或はヴァイオリンに向ふもの、即ち自己の教育的品格を保つて教育的技能教授に没頭する人々が、人夫勞働者、に比較して劣る待遇で有る。三度の食事に人並み以下を愧ぢ『鶯啼んとすれど其美餌なきを悲む』の現在が學校音樂家の實狀態では有るまいか、新刊の樂書の價を聞いて手を出し得ずの悲觀は決して尠く無いので有つて、普通教育に携はる音樂専科教員などにあつては普通訓導との待遇的差別を附せられ、知識技能資格を比較して小兒の如きもの、風下に置かれて、悲憤の涙を流すものそれ幾干であるかを思ふ時に、吾等は長大息を久うせざらんとすれど豈得んやである。俸給に於て尙然り、或は年功加俸等の如きも普通訓導の半額以下の等級に甘んぜざるを得ず。之れ等は誠に現代に於ける不可解の事實であつて、國の風教を維持し國家の音樂教育の振興の爲め、全學校の兒童に技能を教授する教師としては

實に菲薄極まる待遇では有るまいか、早晚この解決は一日も早く附す可きであつて眞に時代錯誤の骨頂で有るので有る。

今少しく實社會も學校當局者も爲政家も目覺よそして待遇的差別徹廢を實現すべく期せねばならぬ。

第五には將來學校の音樂教育を通しての社會文藝化と云ふ事であつて『衣食足つて禮節を知る』と云ふ言辭が有るが現代に於ては人並みの人間ならば勞働をしても眞面目に行へば必ず衣食は僅乍らも必ず得らるゝので、手を懐ろにして怠墮ならざる限り其日其日の衣食を得ることに苦心せずとも濟むので有つてさらば別に權門に媚すとも官邊に阿諛せずとも、一時の榮達や出世が決して其人々の全能全生命では無いから之を望む必要は無いので、必然的に其人材であり有識者であれば邦家が之を迎へて其れを要職に置く可きは理の當然で有る、

要するに人間は高大なる人格を造る可きが至當であつて最も尊い所なので有る。今高大なる人格を作ると云ふ事は一朝一夕のもので無く甚だ無つかしい事で知育的理性の教育と高遠なる感情の訓育が一致合一せられねばならぬ、それを鍛鍊して日々向上して行つて種々なる試練に遇ひ乍ら進んで、遂に彼此兩者の和合的統一が成立して高き人格と形成せられて茲に成立つものである。現代の人心は實に浮動しつゝ在る、一例を擧ぐれば最高機關の國家教育を亨けたる人間が帝國々體に就て不遜の言論を敢てしたり、職に忠實なる可き公職を利用して不義の財を貪る或は一犬吠えて萬犬を怒らせ或は社會階級を相當の理由なく打破せんとする如きは現代の偉大なる物質文明と相平均せざる純正崇高の感情教育の缺如に外ならぬので有る。即ち兩者のバランスが取れて居らぬ缺點から生じて來るので有る、試みに我國文明の進歩に顧みて現今の状態を見るなら

ば、實に驚愕に堪えない程で有るにも不係、感情の良教育は如何で有るかこの
缺陷有る精神上の働きは所謂人心浮動の原調であつて、今や大多數の人格は實
に病的状態を續けて居る、従つて大戰以後？所謂危険思想を稱へて一種の理性
に偏したる考へが各所に靡漫し來つたのは誠に困つた次第であつて、吾人の音
樂的バラダイズより一蹴して暗黒世界に轉下して行つたので、之を以前の極樂
世界に復活させるのは甚だ苦心を要する事であつて精神上の生活の空虚を補血
して引き戻すことに一生懸命で有らねば復興は誠に望み得ないので有る。

舉世の爲政家や有志家がいくら心痛しても大勢の赴く處この重大問題を解決
すべきは音樂の如き高大無邊なる技能の力を俟たなくてはならぬ。之の世を救
ふべきゴット救世主は音樂の如き感情教育の最大なるものでなければならぬ。
然して現在の學校音樂家に依つて之の鍵を持たるか否かと云ふ事を少しく考

へ見たいと思ふ、實を云へば今日迄の自稱大音樂家、大教育音樂家の實力で之
を急に矯正して行かうとするには甚だしく其負擔に堪えられぬのでは有るまい
か？實社會の深刻な要求から出た必適な人格的音樂教育家は果して所々に其陣
營を整へて待ち望んで居るか？どうかは頗る疑問で有つて、近年漸く目醒めて
來た我音樂界も實の所其實方に於て世界のそれと比較するのは無理である。布
哇や印度の藝術家の壘を摩することもやうやくで在ると言ふ者があるのは非
か？露國や伊太利から薄命的に來た音樂家の二三流所を聽いてもそれは分明さ
れはしまいか？彼のエルマンやシューマンハインクの輩に似かやう可き音樂家
は今何年の後に出現するであらうか、を首を長くして待ち望まざるを得ないこ
れからの西洋音樂に従事す可き教育音樂に身を委ぬ可き人士は實に内外多事で
在つて眞に同情すべきで有る現在の儘にては學校音樂を通して社會の文藝化を

喧傳し世態人心の奥底を有意義に復活的に導く事は中々の努力と進運と熱烈なる發憤心を要す可きで有つて、これが隆盛の域に赴くか否かの岐路は自己にも精神物質兩方面に捷利を得可き道程で有つて、其仕事に對しては常に懸命的忠實なる努力を用ひ一時の架空的に走るの憾なき標、能く國家の精神的文明即ち國民の感情教育と共に、社會のより能き文藝化なる大事業を期圖し、至醇にして典雅、高潔にして端麗の國民的風俗を遵致するは、一に繋つて將來の學校音樂家の重大なる責務で有ると、我れも人も大に期待して一日も早く其効績の擧がる時代を待ち望んで居る次第で有る。

大正十年十一月二十日印刷
大正十年十一月二十八日發行

唱歌教授の改造

□定價壹圓三拾錢□

著者 菊池盛太郎
東京市牛込區横寺町四十三番地
發行者 後藤誠雄
東京市京橋區木挽町二ノ十三
印刷者 新井由藏

本製所本製牧

發行元

東京市牛込區横寺町四十三番地

聚

英

閣

振替東京四七八六九番
電話番町四六二番

2633
167

終

